330
3

蓮如上人

330-3

慧燈大師眞蹟

大谷派本願寺前法主大谷光瑩師題字

本願寺派本願寺新法主大谷光明師題字

教祖傳記叢書

蓮如上人

明治
45. 2. 22
内交

文學博士 前田慧雲師題詩

文學博士 南條文雄師序文

佐々木月樵師 跋

須藤光暉著

鬼谷

東山精舍圖書印

大谷派本願寺前法主大谷光瑩師題字

佛日再中

光明

慎郎藏書

本願寺派本願寺新法主大谷光明師題字

日竹

寿像賛 慧恍大師

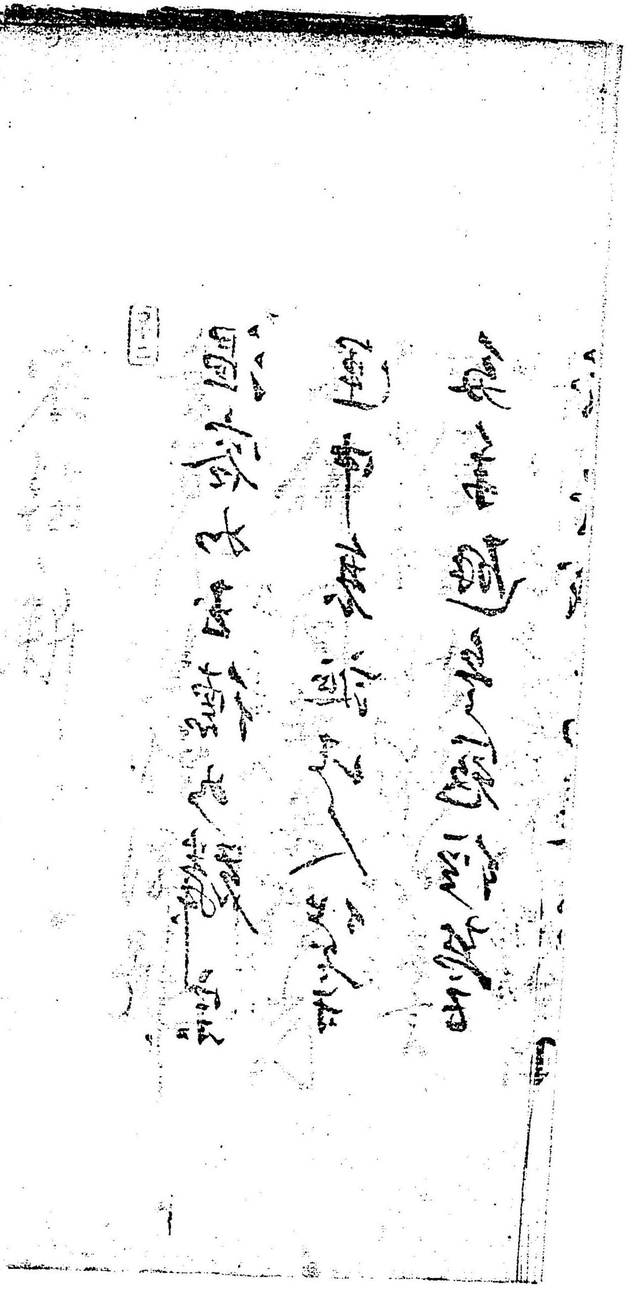
遠孫前田慧宣和南

溫容如玉德如蘭宗
運中興誕此人作宇
多年遊學寇經藝
義要伐苟據要生用
口便玉法經白言
示佛國菩矣住光
無代慧悟濕歸
宸翰新

奉贈慧悟大師

遣前田慧雲和南

田 月



序

金尾文淵堂主ハ嚮キニ須藤光暉氏ノ著ハセシ「愚禿親鸞」ト「空海」ト「法然上人」ト題セル三部ノ書ヲ刊行セシコトアリ、今ヤ「蓮如上人」ノ一書亦脱稿シ、刊行近キニ在リトテ、序文ヲ請ハル、因リテ第一書ノ例ニ倣ヒ、我ガ宗派ノ中興上人タル慧燈大師ノ年譜ノ一斑ヲ鈔錄スベシ。大師諱ハ兼壽、法號蓮如、稱光天皇即位後第三年、應永廿二年乙未二月廿五日、京都大谷ニ於テ、本願寺第七世存如上人ノ長子ト生レ、幼名ヲ布袋丸、又ハ幸亭丸ト云フ。後土御門天皇即位後第廿五年、明應八年己未三月廿五日、山城山科ニ在リテ入寂ス、年八十五。今上天皇明治十五年三月廿二日、慧燈大師ノ諡號宣下アリ。大師誕生ノ月ニ、聖問了譽ハ武藏小石川ニ草庵ヲ建ツ、今ノ傳通院是ナリ。四歳ノ時、後小松天皇ノ孼子、一休禪師宗純出家ス。

六歳ノ時、了譽寂ス、年八十、其著書ニ糅鈔四十八卷、直牒十卷、二藏頌義卅卷等アリ。廿六歳ノ時、聖聰酉譽寂ス、年七十五、了譽ノ弟子ニシテ、增上寺ノ開基ナリ、其著書ニ無量壽經要註記廿四卷、論註記見聞十卷、大原見聞、萬德集、金明集、論藏集、徹髓鈔、當麻曼陀羅鈔等アリト云フ、以テ淨土宗ノ盛ナリシコトヲ察スベシ。卅五歳ノ時、百萬遍知恩寺ハ祈願所トナレリ、卅八歳ノ時、常陸常福寺モ勅願所トナレリ、此ハ了譽ノ曾テ住セシ寺ナリ。四十三歳ニシテ、大師ハ本願寺第八世住職トナリ、四十六歳ニシテ、正信偈大意ヲ著ハシ、四十七歳ヨリ八十四歳マデニ、百數十通ノ消息ヲ作リ、眞宗ヲ再興ス、五帖八十通、夏四通、俗姓及ビ帖外ノ御文是ナリ。五十歳ノ時、眞慧上人下野高田專修寺ヲ伊勢一身田ニ移ス。五十一歳ニシテ、大師ハ大谷ヲ去リテ、三井寺南別所ニ住ス。五十四歳ニシテ、住職ヲ長子順如上人ニ讓ル。五十七歳ヨリ越前吉崎ニ留マリ、

六十一歳ニシテ、河內出口ニ移リ、六十四歳ニシテ、山城山科ニ移ル。六十七歳ノ時、佛光寺經豪來リテ大師ニ歸依シ、名ヲ蓮敎ト改メ、興正寺ヲ建ツ。同年、一休寂ス、年八十八、六十九歳ノ時、順如上人寂ス、年四十二、大師乃チ再ビ本願寺住職トナル。七十二歳ノ時、眞盛上人近江坂本西敎寺ヲ再興ス。七十五歳ニシテ、大師ハ住職ヲ實如上人ニ讓リ、信證院ト號ス。七十八歳ノ時、後土御門天皇、眞盛上人ヲ宮中ニ召シテ圓頓戒ヲ受ケ、傳戒國師眞盛上人ノ八字ヲ宸書シテ之ヲ賜フ、八十一歳ノ時正月、眞盛上人伊賀西蓮寺ニ四十八夜念佛ヲ修ス、二月、上人寂ス、年五十三。同年十月、祐崇ハ宮中ニ於テ十夜法要ヲ修シ、紫衣ヲ賜ハル、十二月鎌倉十夜法要ヲ修ス、是ヲ淨土宗十夜法要ノ權輿トス。八十二歳ヨリ、大師ハ攝津大阪ニ隱居ス。ソモ〳〵大師ノ時ニ當リ、他宗ニ於テ盛ンニ念佛ヲ弘ムルノミナラズ、宗內ニ在リテモ、種々ノ異解者アリ、故ニ大

師ハ終身自他正不ノ別ヲ明カニシテ、念持ノ義ヲ示シ、「何事ヲモ當機ヲカ、ミオボシメシ、十アルモノヲ一ニスルヤウニ、カロ〳〵トリ、八十五歳入滅ノ日ニ至ルマデ、八十年間ノ爲法ノ精神ハ、左ノ法語ニ於テ明カナリト謂フベシ。

一ツ、一宗ノ繁昌ト申スハ、人ノ多クアツマリ、威ノ大ナル事ニテハナク候、一人ナリトモ、人ノ信ヲ取ルガ、一宗ノ繁昌ニテ候、然レバ專修正行ノ繁昌ハ遺弟ノ念力ヨリ成ズト、アソバサレヲカレ候。(蓮如上人御一代記聞書第百廿二條)

サレバコソ、八十四歳ノ十二月五日ノ夜、多數ノ人ノ端ナク集マレルニ對シテハ、「無益ノ歳末ノ禮カナ、歳末ノ禮ニハ、信心ヲトリテ禮ニセヨ」ト云ヒ、七十九歳ノ正月一日ニハ、「道德ハイクツニナルゾ」ト、世間通途ノ儀ニ順ジタル挨拶ノ後ニ、直チニ「道德念佛申

サルベシ」ト催促シテ、自力他力ノ別ト平生業成ノ安心ノ極意ヲ述ベタマヘルナレ。其誠實爲法ノ赤心ハ、四百年後、尙ホ凛然トシテ生氣アリ。此書ヲ讀ム者ハ、豫メ此ノ如キ大師ノ本領ヲ知ルコトヲ要ス、文雄固ヨリ能ク之ヲ知ルト謂フニハ非ズ、唯曾テ聞ク所ヲ陳シテ其遺訓ニ背カザランコトヲ願フノミ、乃チ之ヲ記シテ以テ序文ニ充ツ。

明治四十四年十二月廿三日夜

眞宗大谷派學徒　南條文雄識ス

例　言　六則

一蓮如上人は、眞宗の中宗大師として、一宗の崇敬を受けつゝあれども、素より開立の敎祖にあらず、中興上人を以て之を敎祖の一員とするは、妥當を缺くの嫌ひなからずといふ者あらば、そは未だ蓮如其人を詳悉せざるなり。今日東洋に雄飛せる現代眞宗の威力は、必ずしも古き親鸞聖人そのまゝの敎相ならずして、新らしき蓮如上人の敎義たり、且つ現在奉ずる所の安心は、また遠き親鸞聖人の宣傳に據らずして、近き蓮師の釋せる信條なることを知らば、則ち蓮師の中興上人たると同時に、開立の大師たる資格あることを首肯するに難からじ。是れ余の蓮師を擧げて、敎祖傳記叢書の第四卷に列したる所以なり。

一蓮師の思想の實際的なると、技能の多方面なるとは、酷だ弘法大師に相肖たり。蓮師の通俗的文書を以て徧く信念を獲得せしめんことに努力したると、弘法大師のいろは歌を製し普通敎育を興して、即身成佛の結緣たらしめんことに腐心したると、

全く異曲同工なり。其の文章を能くしたる點に於て、筆札に妙なりし點に於て、遊化を好みたる點に於て、閒寂を愛したる點に於て、名利を厭ひたる點に於て、建築に通じたる點に於て、滅後の妙相を諸人に示したる點に於て、亦復色彩を同じくする也。之れを外にしては、圓滿なる家庭の主長として、至誠敦睦なる交際家として、無病長壽の衞生家として、躬行實踐の勤儉家として、遠慮達見の經濟家として、多くの敎祖と其選を殊にする所あるのみならず、時代の要求とはいへ、有壁築城術の渡來に先だちて、桔梗形築城法を案出したるが如きは、則ち其心直ちに神に通ずるものといふべく、是等の總てを詳說するは、短卷の能く及ぶ所にあらず、而して余の敢て當らざる所なり。幸ひに完きを要むるなかれ。

一蓮師の能文は、世既に定說あり。明治實學の祖師福澤諭吉先生一代の文章は、全く蓮師百八十通の御文より脫化し來りたるものなり。宜なる哉、其の字句博く人口に膾炙すること。本書も亦時に應じて之れを揭錄し、以て嚼蠟の惡文を補ふ。所謂木に竹を接ぎたるの奇觀を呈すれども、亦實に已を得ざるなり。

一大谷派本願寺前門主伯爵大谷光瑩、本願寺派本願寺新門主大谷光明の二師、龍管を揮つて題辭を贈られ、文學博士南條文雄、同前田慧雲兩師、蕪稿高閱の勞を惜まれず、且つ題詠、序文を與へらる、佐々木月樵師も亦、如光法師の後裔として、序言を寄與せられ、大いに卷頭を飾り得たるのみならず、遙かに『愚禿親鸞』に對して、相完きことを得たり。是れ獨余の光榮のみに非ざるなり。謹んで深謝す。

一題簽に複寫したる『蓮如上人』の四文字は、上人第五男本願寺第九世實如上人光兼の眞蹟なり。攝影の法を錯りたるため、字態に多少の變化を來したれども、渾厚なる書風は、略ぼ之を窺ふことを得べし。又挿入の寫眞も、隨時隨處にて個々に攝影せしめたれば、印畫の巧拙一定せず、甚だ雜雜の觀なきにあらざれども、幸ひに諒恕を賜へ。是等遺寶舊蹟に就ては、本文並に卷尾所揭の『巡禮行』に盡くせりと信ず、請ふ一讀領解あらんことを。

一卷頭の挿畫(三色版)は中澤弘光君の靈腕を煩はし、本卷の裝釘意匠は、總て結城素明君の妙案に成ること例の如し。余は兩畫伯の永く余を援けて、無上の光彩を添へ

らるゝことを、衷心より切に鳴謝するなり。

著者識

目次

布袋丸六歳壽像　鹿子御影
慈燈大師御真蹟　年來超勝寺
大派前門主大谷光瑩師題字
本派新門主大谷光明師題字
蓮如上人御真蹟　八葉の法蔵　加州山中邊　詠草
山科御本廟附中宗大師真影
大谷本願寺址并山科本願寺址附山水亭茶室
吉崎道場遺跡并山上光景、湖上遠望
近松顯證寺并堺眞宗寺、四十萬善性寺
本泉寺庭園并蓮如井戸、契裟掛松
井波瑞泉寺、藤島超勝寺、佐々木上宮寺、油ヶ淵址

實悟僧都手書『實悟記』稿本
文學博士前田慧雲師題詩
文學博士南條文雄師序文
佐々木月樵師序
第一　はゝそ葉　一
第二　彼も十五　一五
第三　黒木の灯　二七
第四　東國巡禮　三八
第五　北國行脚　五一
第六　傳燈の光　六二
第七　遠忌の涙　八〇
第八　切火の炎　九四

第九　比叡山風　一〇八
第十　雲樹の宿　一二〇
第十一　弘誓の船　一三三
第十二　越の法蔵　一四七
第十三　緣の吉崎　一五八
第十四　眞如の玉　一七〇
第十五　愛染の闇　一八四
第十六　火中の蓮　一九五
第十七　勝劣の諍　二〇八
第十八　虎狼の牙　二二一
第十九　一難一樂　二三五
第二十　浮生の相　二五二
第廿一　淨土の緣　二六六

目次

第廿二　山科の礎　二七八
第廿三　南殿の憩　二八九
第廿四　大阪の廬　三〇六
第廿五　法性速證　三二〇
附錄
謠曲國府津　結城素明
傳燈署系　中澤弘光
慧燈大師略年表
巡禮行
裝釘意匠
卷頭挿圖　原色版八頁

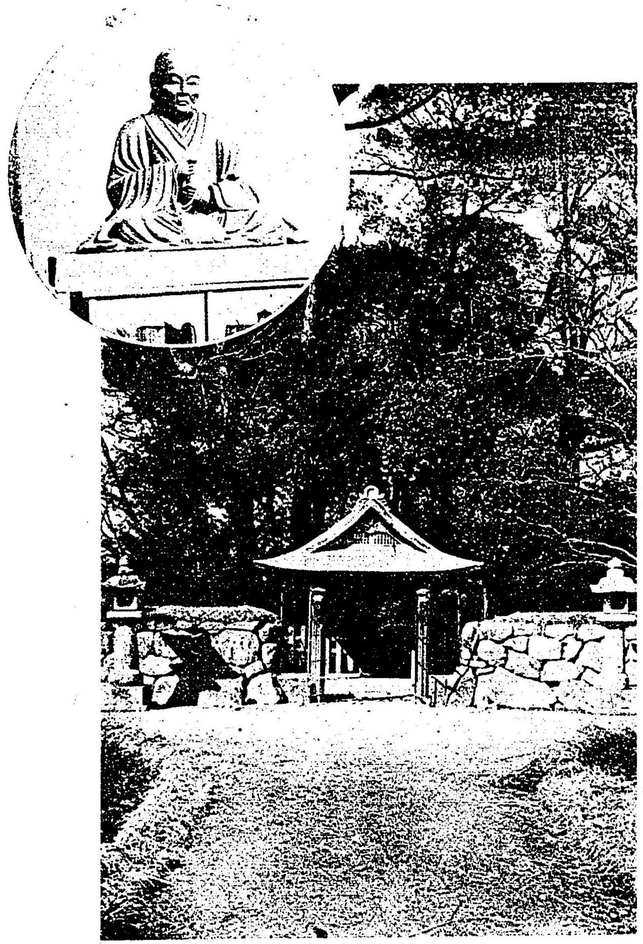
以上

鹿の子の御影　藤島超勝寺蔵

大師六歳の時、母公の畫かしめられし畫像の一なりといふ。大師晩年此の畫像を徴して、當時の衣服を禮へ、鹿の子の小袖に改めさせしより、鹿の子の御影とは申し來りけるなり。

慧燈大師山科本廟　京都府宇治郡山科村

元は野村殿の一部なりしも山科本願寺焼亡の後、本廟のみこゝに存せり。今は東西別院月の上下に交代して奉仕し、中宗廟の威儀漸く備はるに至れり。上部に添加したるは、堺真宗寺奉安大師六十八歳の尊像なり。



第三十三番　盛徳山　極楽寺

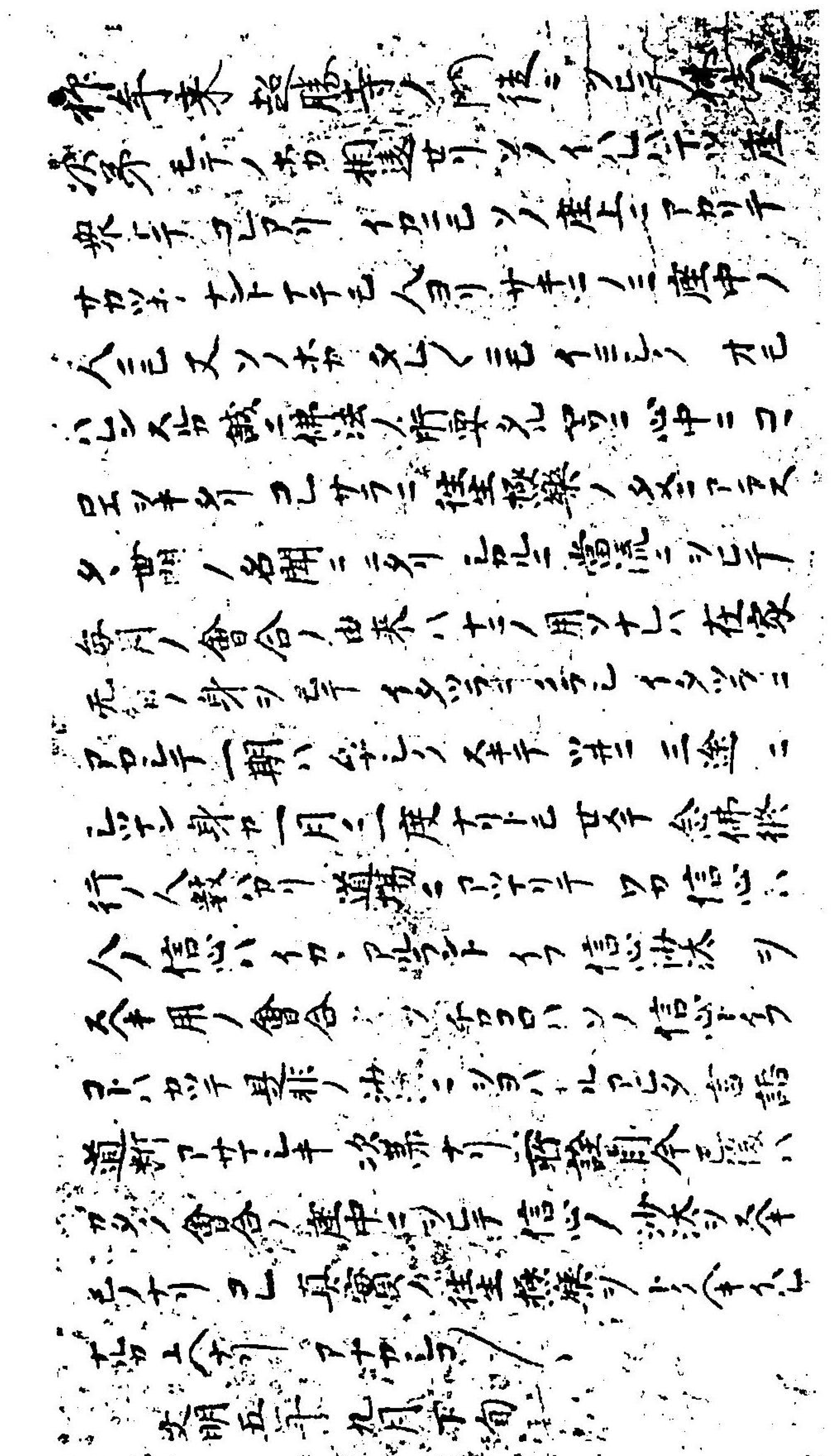
霊場大師山林本願　京都府宇治郡山科村

年來相勝寺の御文

薩摩相勝寺蔵

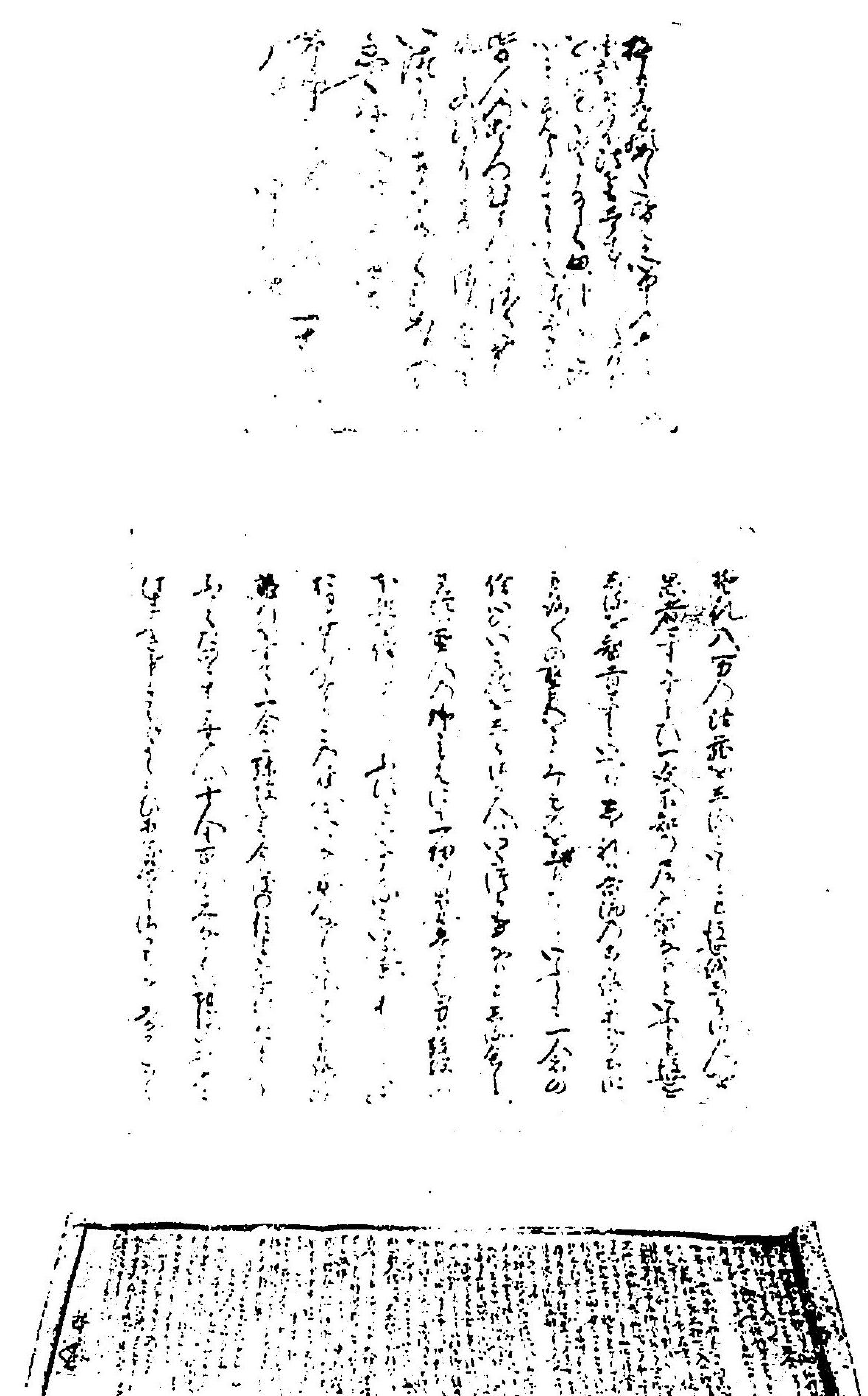
文明五年九月大師吉崎を去つて歸洛せんとし、所らく藤島法明寺に立寄り給ふ。特に授けたる御文なり。

越前國内一向宗十二寺に於て、特に授けたる御文なり。


抑年来超勝寺ノ門徒ニヲヒテ佛法ノ
次第モテノホカ相違セリソノイハレハマツ座
衆トテコレアリイカニモソノ座上ニアリテ
サカツキ・ナトマテモ人ヨリサキニノミ座中ノ
人ニモ又ソノホカ誰々ニモイミシクオモ
ハレンスルカ誠ニ佛法ノ肝要タルヤウニ心中ニコ
コロエタリコレサラニ往生極楽ノタメニアラス
タヾ世間ノ名聞ニニタリシカルニ當流ニヲヒテ
毎月ノ會合ノ由来ハナニノ用ソナレハ在家
無智ノ身ヲモテイタツラニクラシイタツラニ
アカシテ一期ハムナシクスキテツヰニ三途ニ
シツマン身カ一月ニ一度ナリトモセメテ念佛修
行ノ人数ハカリ道場ニアツマリテワカ信心ハ
人ノ信心ハイカヽアルラントイフ信心沙汰ヲス
ヘキ用ノ會合ナルヲチカコロハソノ信心トイフ
コトハカツテ是非ノ沙汰ニヲヨハサルアヒタ言語
道断アサマシキ次第ナリ所詮自今已後ハ
カタク會合ノ座中ニヲヒテ信心ノ沙汰ヲスヘキ
モノナリコレ真實ノ往生極楽ヲトクヘキイハ
レナルカユヘナリアナカシコ／＼
文明五年九月下旬

慧燈大師眞蹟三種

上圖は加州の門徒に與へたる詠草にして、中圖は明應六年大阪に於て法敬坊に與へたる御文、八萬の法藏なり。共に法敬坊の自筆たりし加賀石川郡四十萬の善性寺に十襲せり。下圖は文明五年七月の製にして『加州或山中に於て』といふ長籍の御文なり。同國河北郡二俣の本泉寺に藏す。孰れも考古の寶一宗の貴什といふべし。



蓮如大師眞蹟三種

上圖は加州の門徒に與へたる禁章にして中圖は明應六年大阪に於て法敬坊に與へたる御文八幅の法語なり。共に法敬坊の自筆たりし加賀石川郡四十萬の善性寺に藏せり。下圖は文明五年七月の製にして加州越山中に於ていふ五箇の御文なり。同國河北郡二俣の本泉寺に藏す。[illegible]れし古の墨寶一宗の貴什といふべし。

實悟記稿本

河内古橋願得寺藏

實悟僧都は大師の第廿四子にして舍兄蓮悟の嗣となり願得寺に住せり。晩年長兄等の說く所を筆録して、蓮師一代の逸話を集めたるもの、即ち此の實悟記なり。こゝには目錄と卷首と其最後の二頁とを撮影せり。今日に傳はる蓮悟の遺德記し亦僧都の記筆を經たるものなり。

第壹圖　はゝそ葉

應永廿七季陽下旬第八日に、母堂六歳の少童に、對して語り給ひけるは、願くは兒の御一代に、聖人の御一流を再興し給へとて、懇に心府を述べ給ふが、其まゝ何方ともなく出たまひき。或人その日奇雲四方にたなびき、莊嚴虛空にありと云々。其後再び來給ふ事なし。救世觀音の化現たるものか。

來給ふ事となり世間普の非難されるものと。

同氏はかねを報道機關に發表した非難の其もノ同氏をよく出せる人をの日常體驗一般を再現し得べき感に堪ふ。

しかも稍々はるに過ぎの感一般の人の

編水廿四年四月十日に出版六版の必讀に擬

藥壺圖　幻ノ夕藥

第弐回　東国巡礼

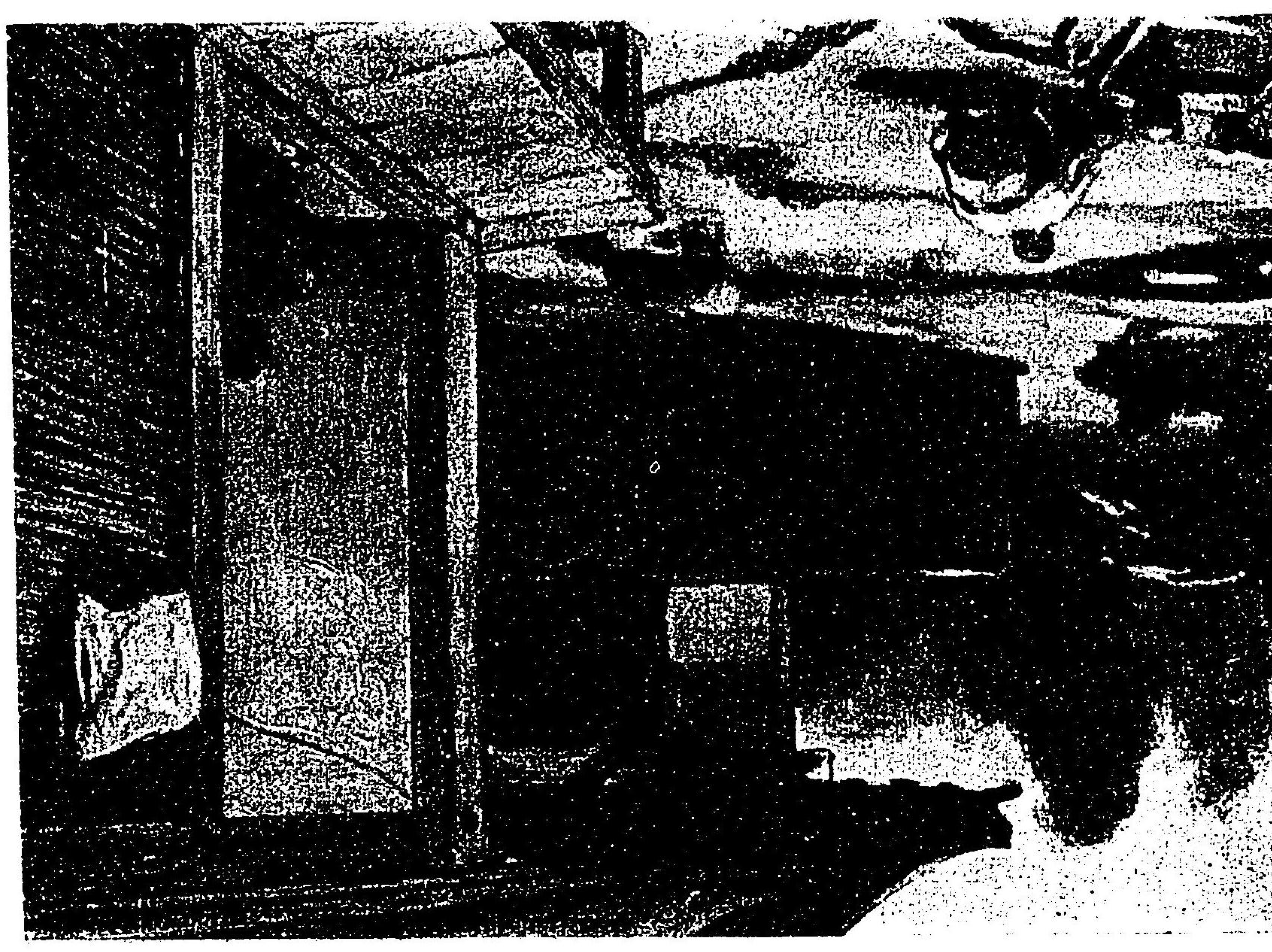
一人みち甲斐甲斐しくはてあるる上は幼童の手に連れられ、西しつゝ、遠ひ続よれこゝ山中さらに蓮華を、はこびはれ続ひこり蓮

所に、明十方に照り輝き、いろ手に抱られ、観音の念仏天下なる念珠の光、

明十方に照り輝き、いろ手に抱られ、観音の念仏天下なる念珠の光、

諸に、二世安楽を授け給ふ。今蓮華西しつゝ、

知らず。



筑前國　東園謹識

一人なく甲斐甲斐しく習しへ。には候ら
はゞあるよは妙蓮の糧様なも御心こり論
読む候ふなこぞ仰せられ候ご御一代記聞
書にあり。くる手に緑られたる念珠の光
明十方に照り輝きて貞宗の念持天下を風
靡しこ世楽を脱ぎ昔今幾千歳なるを
知らず。

紫金園

仏教の光

東京市外荻窪に生涯を送りし、故に下町風の情緒は殆んど無き中野の郊外に、明治末期に於て、一人の居士の建立せし、紫金園なる別荘あり。

往昔の聖僧々々、月夜の宴、詩を作り、歌を詠じ、或は碁を囲み、或は琴を弄し、或は茶を煎じ、或は香を焚き、或は玉のごとき美人の面影に思ひを馳せ、或は山川静光を眺めて、人間の栄枯盛衰を思ひ、或は仏法の真理を考へ、或は人生の意義を問ひ、或は人類の幸福を祈りしと、今日に於ても、その面影は、ありありと、目の当たりに、浮かぶ心地せり。

光の森　南参道

参道は、樹齢数百年の巨木が立ち並ぶ森を抜けると、突然、視界が開け、正面に社殿の全景が現れる。

社殿は、伊勢神宮の様式を基調とした、簡素で力強い造形が特徴である。

参道の両側には、苔むした石灯籠が、まるで人を導くかのように、静かに佇んでいる。

第四圖　刼火の炎

寛正六年正月九日、都は夢の庭いりばな、嶺の嵐や、松吹く風か、枕に傳ふ物音に安けき眠りを破られし時は、嚴めしく甲ふたる山法師の、已に大谷本願寺を取圍みたる後なりき。怪僧如光が勇戰も多勢の敵はものともせず、堂宇を破却し燒却して、あはれ東山木願寺は、只一坏の冷灰となりぬ。

八東山本願寺は、只一坪の冷灰となりぬ。

の類はものともせず、堂宇を破却し焼却して、あは

寺を取囲みたる後なりき。怪僧如光が勇戰も多勢

し時は、殿めしく甲ふたる山法師の、已に大谷本願

松吹く風や、枕に傳ふ物音に安けき眠りを破られ

寛正六年正月九日、都は夢の醒いりばな、嶺の嵐や、

第四圖　切火の炎

八東山本願寺は、只一坪の冷灰となりぬ。

の類はものともせず、堂宇を破却し焼却して、あは

寺を取囲みたる後なりき。怪僧如光が勇戰も多勢

し時は、殿めしく甲ふたる山法師の、已に大谷本願

松吹く風や、枕に傳ふ物音に安けき眠りを破られ

寛正六年正月九日、都は夢の醒いりばな、嶺の嵐や、

第四圖　切火の炎

第四圖　陸火の發

丸東山本陸軍大臣は、只一本の合図をかけた。

ひゝて山地をかすめるものゝ響きは、遠く山麓の部落に響き渡り、次第に強く、遠く、遠く、響き渡る。

響き渡る砲音は、次第に強く、遠く、遠く、響き渡る。

陸軍の大谷本隊は、ひゝて山の南麓に大谷本隊の砲兵隊が、遠く、遠く、響き渡る。

遠く、遠く、響き渡る。

遠く、遠く、響き渡る。

第五圖　一難一樂

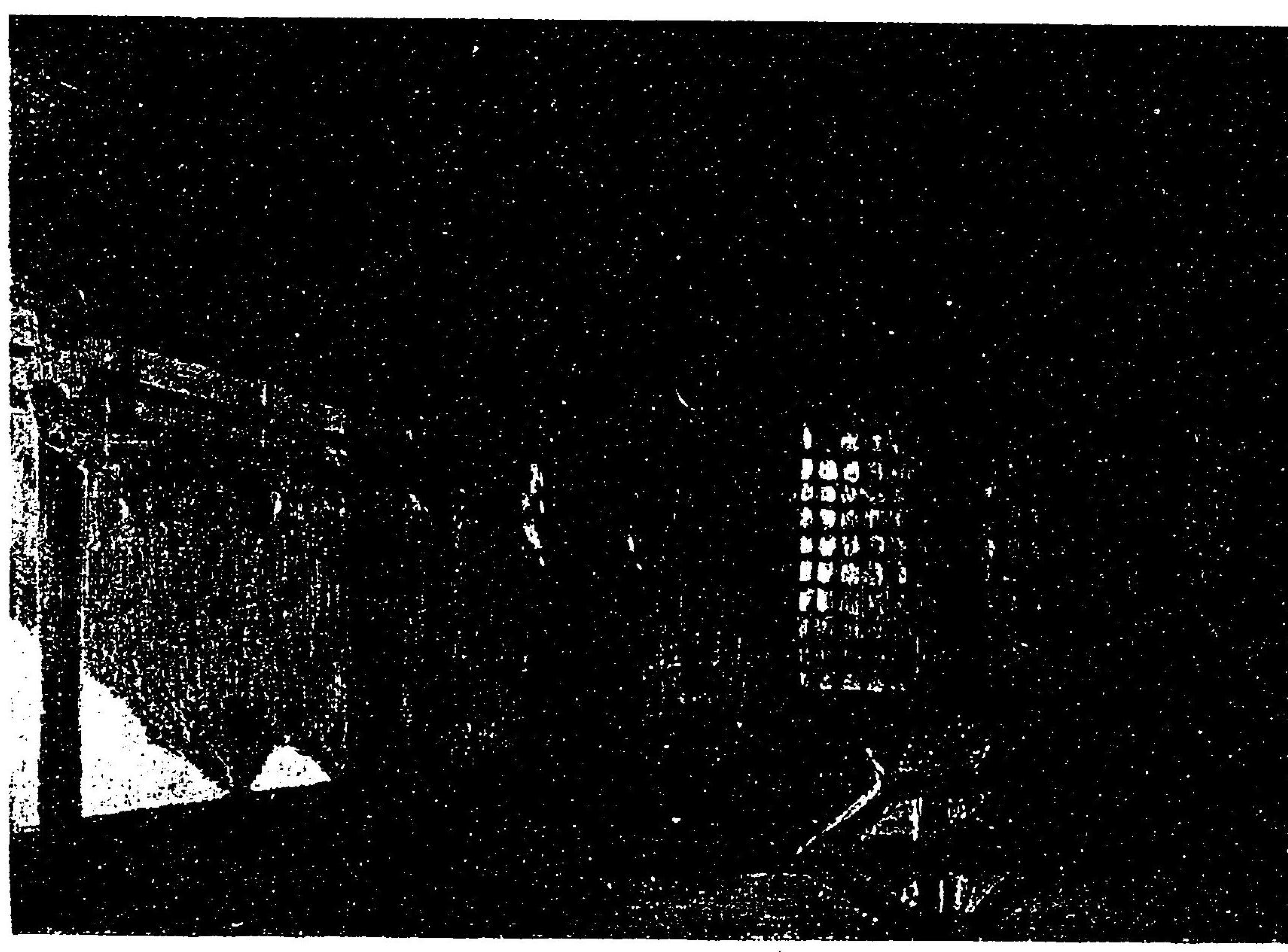
文明七年八月下旬の比、生年六十一歳にして、吉崎の坊舎を捨て、海路遙かに順風を招き、一日がけにて若狭の小濱に舟を寄せたるは、是れ上人の志ならんや、安藝法眼の叛逆によつて、法難を問らず、五年の苦衷を敵の一炬に委ねたるなり。圖中海中に倒れたるは、頗如上人に投げられたる安藝也。

[illegible]

[illegible]

第六圖　浮生の相

其昔契丹國の人、子を一人持ちたりしを失ひ、歎きの餘、觀世音菩薩に祈り侍りしに、日域に渡り念佛の一門の勸化を受けて、後生の一大事を定むべしと示現を蒙り、堺の御坊蓮如上人へぞ參りける。乃ち御教化をたびたび受け申し、難有しさて、契丹國へ歸りけり。



[illegible]

第六圖　管主ノ間

第七圖　大阪の蓮

現今攝州東成郡生玉の庄内大阪といふ在所は、往古よりいかなる約束のありけるにや、明應第五の秋下旬の比より假初めながら、この在所を見そめて、今しも御堂の其謂により、仔細に佛法有緣の淨域を成べり。大阪本願寺は已後七十年間、洛内の大本山たりき。

圖の説明　水力電

大阪市水道第二口取水口十年間繼續の大工事は近日ようやく竣工の新觀を加へんとす。

ちなみに市内の水道は明治三十年の頃より工事を始め、三年目に竣工せしが、その後引續き擴張の工事に着手し、今日にいたりては、市内の需要に應じ、なほ余剰ありて、市内の需要に大関係をもたらせり。

第八圖　法華經觀

數々經經典の入圖しこと如く、釋迦牟尼佛は、東方淨土の妙光菩薩に法華經を說かしむ。菩薩は、國を入れたる水瓶なり。妙光菩薩は、彼方の竹林に羽を休らへる鶴なり。

人類福祉の予期せざる
ことゆゑ人類福祉増進と相共に歩みゆく
為に人ゆゑ人を苦しめる人生に今回
への戦争に直接参戦する覚悟つゝ
居なる人つ満蒙に人こゝに北に元祖国に
最今日既往のマイナスの戦争勝利
後人間　北海道

山科の二坊と二俣の遺蹟

山科本願寺の跡には、土居の廃墟、泉水山の址等今尚ほ見るべきしのあり、東西の別院は月の上下に交代して之れを護持せり。本願寺は西別院の中宗堂にして左は東別院の門景なり。

二俣本願寺に遺されたる九山八海石の庭園は、今尚ほ存して、こゝに往時を偲するを得たり。竹を巻きたる大樹は、孰れも當年の植木なりしさぞ。

湯けむり揚げて。かゝる奇観を見る事は大抵は、歳ごとの春の林水はじめ。

二階本泉寺に登られる武山人新作の額面は、今尚寺にアニノに掛

図額の中深淵につゝ拔刀東照宮の四文字。

さて、東西の図絵は日光の土に突出したる絵なり。本殿本図

山林本殿寺の源に、土武の原に、鎮護の山水泉、鎮護の原土

ものをいふ世さ二世の林山

鎮護の伽二世さ二世

吉崎山上の舊蹟

越前國坂井郡吉崎村

吉崎は文明三年より七年に至る大師當國の根據地にして、眞宗發祥の靈境といふべし。下圖は湖上よりの大觀にして、上圖は山上の花松の古株と本光坊の禮、中圖は寺御堂の殘礎なり。これを中心として考ふる時は、自ら當年の繁況を想像するに難からざるべし。

ひとしさをハじ。

しかきゝるゝ朝は自ら音の響は悲哀なるに鑑

米粒の摩中國は西暦紀元の頃

ゝ小さ中ゝ中ゝ國は諸侯の割據せしが

ゝと大國にして戰ひ

敵にして戰爭絶えざりし

吉備は紀元四三年ゴロ崩御

吉備山上の墳墓

大谷并大阪本願寺址

（製茶學校、蓮如井戸

上圖は東山大谷本願寺の址にして、現に華頂山知恩院阿彌陀堂の下、崇泰院の上にある老杉こそ、大谷殿の遺木ならめといへり。

中下の二圖は大阪本願寺の遺物として現に第四師團司令部構内に存する蓮如上人製裝飾の松と蓮如井戸となり。戰次の兵燹にも、雷火にも焚かれずして、尽れのみ今日に現存するも、一奇なからや。

今日に於ては全く一般に忘れられ、靈域荒廢するに任せられたが、嘗て明治の末葉に於ては人類愛の發揚と、時間信仰の盛隆とを中心とする二個の大規模の靈場として、各樣の建物が建てられ、思想國際的堂々たる靈場として、土國に東山大谷本願寺の如に靈山地

大谷共 大阪本願寺址 （現在焼）、靈場址

近松顯證寺并堺眞宗寺、四十萬善性寺

上部は十二年間の本所たりし大津近松御坊を大
塚の方より見たる圖にして、下部右は加賀四十萬
善性寺の雪景、左は和泉堺眞宗寺の蓮如上人御廟
なり。

かも

春日の春の祭礼は浄瑠璃の本場土人崎線

の盛りを見せる國に一つの有名な四十萬

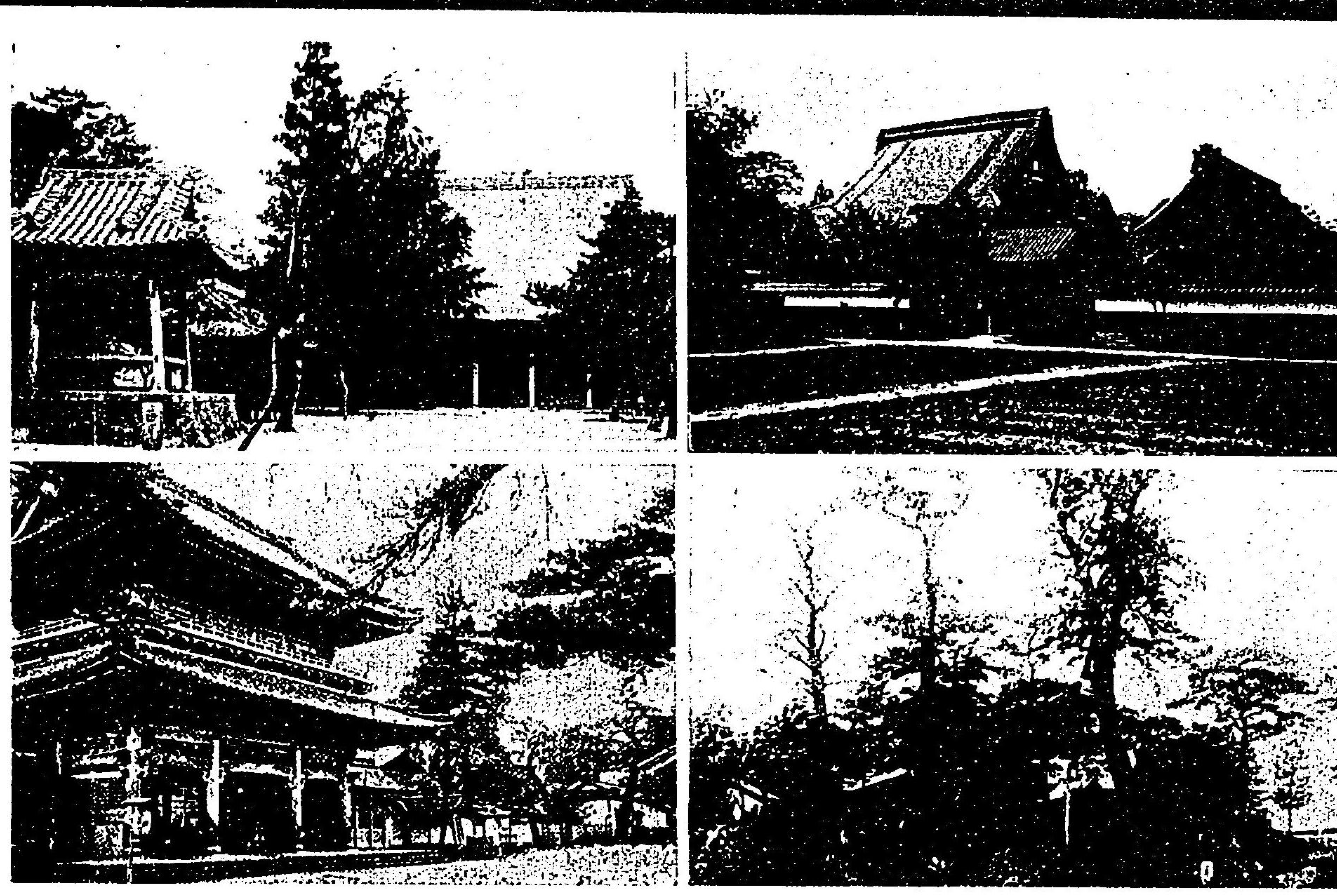
坪の大形遊園地が出来セリ大形遊園地は

上野に十二年間の本部セリ

若狭湾国立公園／四十萬坪

藤島超勝寺、佐々木上宮寺、三州油ヶ崎、井波瑞泉寺

四郎は、しばらく、御ぶしに、上方へ、三河へ、右に、越前へ、中ぶくろの、深緑、海鼠、足羽郡、佐々木、井波、光徳、瑞泉、上宮、白鳥、超勝寺、油ヶ崎、寺、地蔵、崎、何れも、大師、ら、遺跡、大往生、



蓮如上人

須藤光暉著

第一　はゝそ葉

粟田口青蓮院の南、祇園林の北、東山知恩院の西の麓、白川の東の涯、こゝ大谷の一郭に、さゝやかながら土居ひき繞らして、いとものふりたる二宇の御堂を包擁する精舍ありけり。檜皮葺の門の簷、漸く傾きたれども、龍谷山の榜額には、尚ほ未だ雀羅を張らず、三間四面の本堂、やつ〳〵しからぬにあらねども、久遠實誠阿彌陀本願寺の勅額は、舊に依つて金色の光り赫奕たり。乃ち知んぬ、是れなん千古の大活眼を洞開して、持律戒行の制誡を打破し、聖道雜修の難行を唾棄し、新に眞俗二諦の敎旨を掬め、易行淨土の法門を開き、進んで在家往生の先達となり、絶待他力の宗祖と仰

れし、親鸞聖人の靈廟、淨土眞宗の本山なりけるを。

聖人の滅後こゝに一百五十九年、慥如存慥父子心を同うして、遺德を彰はし、宗綱を張り、力めて法燈を掲げたる餘光も、今は滅ゆるに垂として、峰の木枯風落葉を大谷に吹きおろし、詣づる人の道をさへ埋むれども、誰かき掃ふ者もなく、乾く間もなき夕の露は、宵のほどより霜を結びて、たばしる霰の消えんともせず、極月二十八日の夜は、鐘の音凍る亥中ばかりに更け初めたり。

一天無二の尊像を安置したる御影堂は、五間四面の寢殿造りにして、物さびたれども威德尙ほ炳然たり。更わたる寒夜にも、一穗の常燈ばかりは、不斷の光明を放ちつゝ、徐ろに盤上の三具足を照らし出し、御廚子の金具の仄かにも耀やくさま、いとしも幽玄に仰がれつゝし。金障子深く閉ち籠めたれば、外陣の方は、見るよしあらねども、護持の僧もはや退りて、御佛ばかり聖け く睡ませ給ふ內陣の、御前近く歩み寄る人影、またゝく佛灯に照らされて、おぼろながらも壇上に落ち來たれり。色よき衣の長き裳を窶げながら、肅しやかに靈壇に登り行き、跪づきて御廚子の扉を開きまゐらせ、先づ恭しく禮拜してのち、再び元の盤上に還り來ぬ。かくて常燈の燈心をかき立て、華蠟燭に灯をうつして、高く燈臺に掲げたりしかば、金銀の瑤珞、雲澗の彩楹、影搖の壯嚴悉く靈光を放ち、まばゆきばかり耀きわたりて、今は遍るゝ影とてもあらざりけり。

影の主は、芳しき線香を獻つりて、やをら身後をふり顧るに、髻髮ふさ〳〵と肩にかゝれる稚兒の、ちよこ〳〵と歩みよりて、押並びて坐に着きたるあり。御堂の夜はいよ〳〵深く、師走の寒はます〳〵烈しきをも、心に怕れず、身にも厭はぬげなるは、いかなる深き願ぎ事のあるやらん、問はまほし、聞かまほし。

白く纖き手と、愛らしく小さき手とは、同じやうに掌を合はせて、懇念に御影をうち拜めり。默念にやゝ刻をうつして、伏したる面を擡げし時には、母なる人の双の眼に、清き涙の珠を結びて、一粒ごとに燈明に照り榮ゆるを見たりき。稚兒は爽やかなる眸を凝らして、いと訝かしげに瞶めたりしを、母なる人の疾く心づきけん、忙はしく懷紙を取り出し、列ぬく涙を拭ひ去りて、莞爾として稚兒の冷たき手を握り、我が

膝下にひき寄せつゝ、

『布袋丸よ、妾の泣きしを訝かしとばし思ひ給ふか。こゝに在ます御開山様の、盡きぬ御恩を思ふたびに、妾はいつも難有涙に咽せかへりて、泣かぬ時とては無きとぞかし』と、背を徐かに撫で擦りぬ。

兩手を膝に投げかけて、ひつたり母に寄り添ふたる布袋丸は、人の肝に銘つくるばかり、力の籠りし母の御聲を、小耳ながらも明らかに聽き分けて、得心を點頭に示せば、母は嬉しげに兒の面をうち目戍り、哺めるが如くに說き聞かせつ。

『和兒よ、能く聽き給へ。六の歳もはや暮れつ。明れば七歳になり給へば、今母が白さんことを、深く心に留め置きて、必ず〳〵忘れ給ふなよ』

袿の襟かいつくろひて、儼と坐を正むるに、布袋丸も何かは知らず、圓き小膝に兩手をおきて、正しく母公に對したり。その時、母なる人は、帛紗包を解き放ちて、表紙紛麗しく修らひたる、一幅の掛軸を取り出し、兒の前にうち披けば、總角に髮とりあげたる布袋丸の、緋鹿子の小袖着て、右手に扇を把りたるが、宛然に畫がゝれたるなり。

口を一文字にひき結びて、眼を吾が小照に凝らしたる布袋丸を、母はつく〳〵見てありしが、莞爾として微笑みつゝ、

『この總角を、いかなる人と見給ふぞ。箇やうに幼稚おはすれども、是ぞ正しく御開山聖人十世の嫡孫、やがては第八代を相承して、本願寺の上人と仰がれ給ふ御方なるよ。努尋常の小兒とばし思ひ給ひそ。態々畫師に言ひ付けて、幼童の寫像を描かせつるは、母が記念に見まほしきと、後の代の思ひ出どの爲めなり。母傍らにあらずとも、心は絶えず影身に添ひて、いつ〳〵までも和兒の守護となりなんほどに、母なしとても、搏へて戀れ慕ひ給ふな』と、語るうちにも順に手をそへて、その面貌を小照と對照ぶるなり。

始らくありて、寫像の軸を卷き收め、幾たびとなく高祖の眞影を伏拜み、頰に傳ふ感涙を拭ひもやらず、布袋丸をひき附けて、

『これ、和兒、御開山様を御覽せよ、九十年の御一生を、本願の弘通に盡し給ひて、

一寺一坊の御休息所さへ御造りなく、一人にても眞實の信を取らせ、攝取不捨の光益に與らせんとて、御心を碎き給ひたるぞや。されば、我等如き愚痴罪業の穢れた る身も、一念の信心決定によつて、如來悲願の御救ひを被り、安養淨土の往生を得らるゝなれ。かゝる難有き御法ながら、御滅後こゝに百五十餘年、一世の亂れ、時の擾ぎに、後世を思ふ心薄く、覺如上人の御勸化、存覺上人の御製作も、今は漸く衰へ行きて、稱名念佛の聲もいと微かに、眞實信心の門徒も極めて稀になりぬ。あれ見給へ、專修念佛の佛前に、聖道雜修の姿を摸して、密教の護摩壇を築き、偏へに山門の意を迎へんとはせらるゝなり。是れやがて五濁惡世の教法を悲歎して、「外道梵士尼乾志に、心は變らぬものとして、如來の法衣を恒に被て、一切鬼神を崇むめり。悲しきかなや此頃の、和國の道俗皆ともに、佛教の威儀を元として、天地の鬼神を尊敬す。五濁邪惡のしるしには、僧ぞ法師といふ御名を、奴婢僕使に名づけてぞ、卑しきものと定めたる」と、御和讃に遊ばしたる、御開山樣の御本志と、思ひ給ふか。いかに山門の權威熾んなればとて、興昇僧徒力者法師に、空しく屈することあらうや。喃、和兒、

妾が今牢く心に留め置きて、努忘れ給ふなと白しゝは、こゝの道理を領承みて、淨土眞宗の法流を、偏く海内に流布し給へと白す事ぞ』

『言ふ聲に力籠りて、吐く息に熱涙しる、感歎の念いよ〳〵深くなりてか、忽ち口を噤みて、涙湧く眼を靜かに冥せ、念珠爪繰り默念に耽りしかば、布袋丸は瞬きもせず母上の御面を瞶めて、機みがちなる呼吸の息さへ、忍びやかに凝らすにぞある。寒夜ます〳〵深くして、御堂はさながら太古の如く、唯だ蠟燭の燃ゆる聲のみ、仄かに寂寞を破るなりき。

重ねて眼を開きたる布袋丸が母は、清き面は珪の如く照り輝きて、優しき肩のあたりより、後光のさし出るばかり、いと神々しき妙相を現じたり。

『和兒も學問手習ひし給へば、何を措きても聖教を御覽せよ、御開山樣の心血は、盡くこれに瀝れ在します。横曾根の性信房に賜はする御消息にも、淨土の念佛者の事を說き給ひて、「詮じ候ふ所は、御身に限らず念佛申さん人々は、我が御身の料を思召さずとも、朝家の御爲め、國民の爲めに、念佛を申し合せ給ひ候はゞ、目出たう

候ふべし。往生を不定に思し召さん人は、先づ我が身の往生を思し召して御念佛候ふべし。我が身の往生一定と思し召さん人は、佛の御恩を思し召さんに、御報恩のために御念佛心に入れて申して、世の中安穩なれ、佛法弘まれと思し召すべしとぞ覺え候ふ」と遊ばされたり。御開山樣の難有さ思し召しは、筒やうに大きく、筒やうに博く在しまし、貧窮と富貴とを簡ばず、下智と高才とを簡ばず、多聞持淨戒を簡ばず、破戒罪根深を簡ばず、皆悉く念佛の功德によつて、彌陀超世の悲願に攝取せられ、淨土往生を遂げさせんとはし給ひしなり。和兒よ、和兒の御一代には、御開山聖人の御一流を弘通して、祖師の恩德に報ひ奉らんと、志を立て給ふべし。こは、母のみの願ひならず、御開山樣の御命なり。阿彌陀如來の佛勅なり。和兒が先天より負ひ給へる天職なり。會得し給ひしか。了解し給ひしか。いかにとや、和兒』

容を仰げば端嚴微妙にして、頭自から低りつべし。聲を承はれば亮々朗々として、心深く徹しつべし。一語一句、刀もて肝に銘つくるが如く、布袋丸は漏らさず之れを記憶し得たり。乃て膝下に手をつきて、

『母上の御仰せ、兒が心に明らかに覺えて候ふ。必ず忘れ申すまじ』と、凛然として誓へるなり。

母は手を擧げて賞め稱へ、其のまゝ膝の上に抱き取りて、抱きしめつ、頰摩りしつ、慈愛の涙を髫髮に瀝ぎつゝ、

『賢い兒よ。健げにも能く納得し給ひしぞ。吉野の御門還御ましまして、兩朝御和睦成りしのちは、世の亂治まりて、靜謐なるべき筈ながら、關東の戰ひといひ、室町殿御兄弟の確執といひ、靜かなる水の底にも、岩うつ浪の潛るゝ如く、いつをも知れぬ世の樣なり。賴りなき世に在る人ほど、後世を恐るゝ者なければ、かゝる群盲に安心の杖を授けて、行くべき道を敎へ給へ。是れ當流興隆の基ぞかし。賢い兒ぞ、忘れ給ふな』と、背後撫で摩りて言ひ聽かせぬ。

布袋丸も初めて莞爾と笑顏をつくり、

『得度をもし、學問をもする頃には、必ず仰せに隨ひて、御一流を弘め申さん。母上も傍らより御敎へ給ひてよ』

『嬉しき事を聽くものかな。妾もいつまで傍に在りて、和兒の上人風を見まほしきは山山ながら、こゝを能く聽き分け給へ。母は此處に在るべき身にあらず、奇しき因緣に繫がれて、存如御方に御給仕いたし、和兒を擧げまゐらせしかど、母が役務は今日果たり。名殘はいとゞ盡きねども、今こそ赤繩の緒を斷ちて、別れ去るべき時とはなれり。さらばよ和兒、必らず〳〵母が遺しゝ言の葉を、あだに散らし給ふなよ』と、臺像の包をかき擁きて蹌然と坐を立ちたり。

心得がたき母の語に、布袋丸は愕きながらも、緊と裳に取り縋りて、

『母上何處に行き給ふぞ。兒をも共に伴れてたべ』と、おろ〳〵としてうち仰ぎぬ。

『聽き分なき事言ひ給ふな、和兒は本願寺第八代の上人なり、御影像に別れまつりて、何處へか行かるべき。妾は中國備後の者にて、故ありてこゝに來り、今また故ありてこゝを去るなり。來るも去るも機緣なれば、和兒がいかに留め給ふとも、所詮留まるべきにあらず。母戀ひしと思ひ給はゞ、懇念に御念佛申さるべし。稱名の聲する時、母は必ずそこに來たりて、和兒とゝもに尊號を唱ふべきなり。いざ、さらば』

徐かに兒の手を拂ひ除けて、裳輕く捌きつゝ、はや歩みを運び給ふに、布袋丸は哀しさ言はん方なく、走り寄つて縋らんとすれば、する〳〵と身を引きて、後部の妻戸に靠り添ひながら、今ひとたび振りかへりて、

『さらばよ、和兒』

慈愛濃かき眦を垂れて、愛慕に迷ふ吾が兒を一目視たるまゝ、妻戸を靜かにうち排らきしが、召し伴れ給ふ供人もなく、唯だ身一つを闇の奥に隱すとぞ見えし、霧の如く幻の如く、在りし姿はかき消す如くに、何處ともなく飄忽として立ち去り給ひけり。

餘りの事に聲も得出でず、布袋丸は妻戸の内に走り入りしが、影前の御燈もこゝには映さず、見やる限り黑晴々として、物のあやめも分くよしなく、彼方に走り、此方に迴り、愛惜の關にさまよふのみ、更に行方は知れざりき。身も心も勞れ惱みて、布袋丸はそこに小さき身を横へ、裂るばかりの心の底より、湧きかへる涙堰きもあへず、初めて瞼の堤を決して、聲を立てゝぞ泣き叫びぬ。

時も時、場所も場所、深夜の御堂に奇しき人の泣き聲すれば、遙かにこれを聞き付けたる人々の、浮き腰のまゝ評議に時を移すほどに、門主巧如上人は讀みさしたる經論の卷を掩ふて、自ら紙燭に灯を點し、先に立つて御堂に出づれば、新門主たる圓兼存如も、父公の跡に續きて、御影前に進み入りたり。

見れば、誰が獻つりけん、香炉には線香を燃きて、縷の如き二條の烟の夢のやうに立ち騰れるに、常には灯さぬ華蠟燭の、明々と照らす處、夕の勤行果るとゝもに、恥と閉帳し奉つりたる、御眞影は開扉せられて、今までこゝに禮拜したる者ある如し。父子は互みに目を見合せて、奇異なる爲體を訝るのみなり。加旃、人の出入すべからざる、後部の裏戸も開け放たれて、彼の泣き聲は、この黑暗の裡より起り來るを知りては、父子もなか〳〵沈着を保ち難く、上人先づ跳つて裏戸の口をさし覗き、紙燭を高く掲ぐれば、圓兼も續いて走せ着け、灯光に透して裡を見やりぬ。

中は黑一色に塗りたるかと疑はれて、玄冬の寒氣劍の如く襲ひ來たり、篤はす悽然として衿を合はせしむ。時に闇の奥より芬芳たる異香の薫じ來たると覺ゆれば、そこ

に赫奕たる五彩の奇雲たなびき、壯華連りに虚空に飜へると見て、何かは知らず、遂はしく跪づきつゝ、其方に對つて伏し拜みたりき。拜み果て目を開くに、裡は元の闇にして、冷濕の氣の罩むる所、紙燭の灯光の盡きなんとする邊、小さき兒の横ばりて、今は高き聲も得出さず、歔欷げて嗚咽び泣くものあるを見出したり。

泣き聲は是れなりけり。上人のさし上ぐる紙燭の下、圓兼が跳り入つて抱き上ぐるに、被の兒は斯くと見るより、

『母樣が……』と、只だ一聲、父に葬と抱き着きたり。

圓兼は愕きぬ。上人は怪しみぬ。泣聲の主は、吾が兒なりき。吾が孫なりき。圓兼はまだ二十五歳、青春の血の淵り溢るゝ若き父なり。上人も尚ほ四十五齡、壯氣漸く成熟せる盛んの祖父なり。愛に痛める心の傷を、我から忍び勵して、右より慰め、左より賺し、焦つ心を押鎭めて、さま〳〵に問ひ試むれば、這はそも奈何——?!

時しも、稱光天皇の御宇、應永二十七年庚子の十二月廿八日、天に星光なく地に霜花さく夜、温き恩愛の懷より遥棄られて、悠久に慈母を喪ひたる布袋丸には、遂に忘

れぬ昏迷哀慕の闇夜なりけらし。

一、至りてかたきは、石なり。至りてやはらかなるは、水なり。水よく石を穿つ、心源もし徹しなば、菩提の覺道、何事か成ぜざらんといへる古き詞あり。いかに不信なりとも、聽聞を心に入れて申さば、御慈悲にて候間、信を得べきなり。只佛法は聽聞に極まるとなり云々。

（御一代聞書）

第二　彼も十五

古都の秋既に長けて、洞の紅葉を水谷川の岸に訪ふ頃となりぬ。春日野の下草霜に飽きて赭く寂び、猿澤の池の柳采女の衣を脱すてゝ、水にも冬の景の浮ぶ時、大乘院の僧房に在りて、六經十一論に心眼を曉し、有空中の三時教に悟入し、遂く法相の玄底を敲く若僧ありたり。廣學多聞、天台顯密の秘奥に達し、三論八不の眞理を覩じ、律を學んでは、戒定慧の三學を具足し、華嚴を修めては、一心法界の妙義を了解して、其の深知博才測るべからざるものあれば、經覺僧正の寵遇衆に勝れて、いかなる深秘の法文をも、此の兼壽法印ばかりには惜しむことなく、壺底を傾けて授けられたり。

南部の一勢力として、京都にまでも威を振ふ大乘院の大衆達も、智德に抗がふ夜叉力なかりけん、物に堪らへぬ荒法師ながら、この客僧の法印に對しては、飴に馴るゝ小兒の如く、唯だ愛すべき佛弟子なりき。況てや問法修行の沙門等は、老少と新古とに論なく、偏へに兼壽を推尊して、下風に立たんことを甘ずるにぞ、大乘院に於ける

法印の地位は、師弟の心を一つにして信頼するより、自から首座の學匠の如き狀勢となりぬ。されども、兼譽は聊かも之れを衿るの色なく、山官ながらも僧綱は法印權僧都に至り、身は廣橋中納言兼郷卿の猶子として、中納言兼譽と稱へらるれど、自ら謙して學法の一沙門となし、凡僧沙彌の班に伍し、寒暑ともに麻の法衣を改むることなく、一盞の笠、一足の草鞋、自ら笈樹を負うて出入するを常としたれば、一山の聲望こゝに歸して、興福寺の總てに於て、兼譽法印の盛名は洪鐘の如く、鳴りわたらぬ隈とてもなかりき。

この法印こそ、出所不定の母公に遺棄られたりし布袋丸の、二十年を經たる今の法師風なりけれ。布袋丸は、かの奇異なる不運を招きたるのち、祖父巧如上人より、幸亭丸の號を賜はりて、新たなる名に呼び更へたれども、其しまゐらする人もなくて、霞の如く立ち去り給ひし母公をば、瘠寐の間さへ忘るゝことなく、日を經るまゝに愛慕の涙いや滋く、身の痩さへ見ゆるばかりなれば、祖父の上人も、父の新門も、兒の心のいぢらしさに、年を越えては更に搜索の人を增して、八方に手を配りたりしが、

それぞと思ふ風の音づれもなく、遣はし人は皆な手を空しうして、力なげに還り來たりぬ。今は雲を分け地を穿つより外なければ、幸亭丸も泣く〳〵念ひ諦らめて、別れ奉りし二十八日を、歸らぬ母公の御命日とし、いと懇ろに追善供養なしまゐらせ、僅かに追慕の情を慰めつ。父圓兼も、飽きも倦かれもせぬ妻ながら、引き留むべき袖もなければ、同じ愛ひに經偈を手向くる外、また詮ん術もあらざりけり。

圓兼は尙ほ二十九歳、法燈を繼がんには、幾十年を剩したる身なり。幸亭丸はありといふとも、一人兒にては心許なし。子々孫々相承の當流にては、血統もまた大事なれば、幼稚いもの、介錯をもし、御身の給仕をもさせんために、更に繼室を迎へ給へと、父上人の勸めあり、特信の門徒が慫慂もありて、遂に室町將軍の御家人海老名氏の女を娶り、新たに後園一朶の花を添ふることとはなれり。

翠悉よく和合して、應永三十年海老名氏は安產の紐を解き、花の如き女子を擧げぬ。幸亭丸は九歳にして、初めて愛らしき妹を得たり。されば、畏母の妹なりとて、分隔てする心はなく、深くこの妹を愛して、之れが爲めに去にし母公を懷ふ念ひも、忘る

るまでに狎れ親しみしが、さればとて、海老名氏に對しては、恭虔の心毫弛まず、禮儀正しく尊敬するにぞ、凡人の悲しさには、我が慈しむ心は掬で、可惜禮節の盾に躲れ、親睦みげのなき擧動かな。母は隔つる心なけれど、子の狎れ近かぬぞ是非もなき。かくとは知らぬ口の端に、繼しき中の母なればなど、陰語さるゝが口惜しさよと、時には海老名氏の胸中に、愚痴の往來することありき。

かゝる感情の支吾ひは、得て深き傷を生じて、心を破ることなきにあらず。幸亨丸の健かに成人するに伴れ、海老名氏の心には、何とやらん嫉ましき思ひ發り、陽は深く謹めども、心措かれぬ人に遇ふては、時に意中の志望を洩して、あはれ一人の男兒もがなと、しみ〳〵語ることさへありき。圓兼には、固より愛憎の念あるべき筈なく、寧、生母の手に撫で摩られて、美しく育ち行く女を見るにも、母公在はさぬ幸亨丸を、いとしと思ふ愛感は、八潮に倍して切なるべけれど、妻に對する義理ありて、流石に偏頗の譏りを避け、陽はに愛を注ぐことなく、情を制して鷹揚にふるまふにぞ、幸亨丸を被ふべき愛の光りは、唯だ祖父上人の隱れたる慈しみのみとぞなりぬる。

繼母に對する幸亨丸の態度は、歳どゝもに次第に恭虔を增し、篤敬を加へ、親しみて狎れざる所、あつばれ孝子の行ひなりき。巧如上人はこれを見る毎に、幸亨丸を密かに招きて、

『謹愼の行ひには、いかなる邪惡も敵すまじきが、斯く堅固に行ふことは、太く心の勞れやせん。さりながら、其方の母は尋常人とも思はれぬに、故ら其方を手放せしこそ、深き意味のあることならめ。思ふに其方の母公は、斯くして其方の心を鍛え、金剛不退の信心を決定させんためなるべし。光明は其方を待ちぬ。努めよや、努めよや』と、懇篤に卓勵し給へり。

謹しんで承まはりし幸亨丸は、祖父上の慈愛肝に銘じて難有く、去に給ひつる母公の、遺訓のほどもいと畏し。いかにせば御開山聖人の、御一流を世に弘めて、有情を化度することを得べきと、小さき胸を惱しつゝ、祖父上の御前を退りて、其の足にて御堂の方に行きて見たり。

今日は二月二十八日なり。彼岸といひ、御開山の御精進日といひ、心あらん信者な

らば、踵を接して詣で來べく、御堂には人の頭の重なりて、談義の僧は聲を嗄らし、一流の安心を説くにぞあらん。階前の梅は咲き亂れて、經よみ鳥の數啼けども、歩みを運ぶ詣人もなく、護持の僧さへ坐睡りて圓齟を傾げり、かくても他力本願の本山なりや。祖師の御影の在します本願寺の御堂なりや。實に誠衰へたり。母上の慨かせ給ひしは、寔に所以ある事なりき。

幸亭丸は深く心を動かしたり。古ばけたる壁、破壞せんとする翠簾、目に觸るゝものとして、一も涙を誘はぬはなければ、面を掩ふて御堂より驅け下りぬ。

『當山こそ斯くもあれ、今小路の常樂寺は、存覺上人の御開基なれば、宗風今も衰へであらうづれ。彼處の御堂を見て參らん』

慈くも心に思ひ着きて、寺門より北の方なる、彼の御寺に詣でたり。來て見れば、此處も今はやつ〳〵しくて、參詣の老若も、隻手の指に數へつべし。殿堂境内我が本山より狹ければ、掃除の自から行き屆きたるが、我が寺よりは勝しなるに過ぎじ。此處も亦我が意を懌ばすに足るものなしと、幸亭丸はいと不興げに立ち去りたり。

其のまゝ我が門に還らんとして、偶然心に思ひ得たるは、朝な夕な頭の上に梵鐘を聞き、風のまに〳〵常行念佛の木魚を送る、華頂山知恩院なり。この御寺は、今こそ宗義を異にすれ、同じく念佛の道場にして、本師法然上人の芳躅、本廟の在る聖地なれば、信仰自から別なるべし。兎も角も詣で見ばやと、足を回して磴道を登り行きたり。

鎮西白旗の總本山とて、流石に法幢に榮えたり。阿彌陀堂にも、御影堂にも、木魚の音澄みわたりて、參詣の信徒も盡くることなく、念佛の聲は風の如く耳を襲へり。聖岡丁擧上人とやらん、稀代の高僧關東に出て、念々不能斷の宗旨を弘通し、聖聰酉擧上人といふ者、師の遺志を紹ぎて宣揚したれば、この宗風徧く及びて、それが爲に我が門の衰へたるよし、人の語るを聞きたりしが、今にして始めて悟りぬ。寔に法は機に應じて興り、人を待つて弘まるものなり。祖師上人の御一流は、正しく法然上人の眞宗にして、專修念佛の易行門なるに、一は衰へ、一は榮ふること、詮ずる所人の罪なり。我等祖師聖人の子孫として、かくまで宗門の衰頽を來たせしこと、懈怠とや

いはん。無愧とやいはん。祖師聖人の照覽こそ恐しけれと、幸亭丸は滿身に粟を生じて、悚然として戰慄したりき。

折から參詣の人々の、流るゝ如く本地堂に走せ行くに、何事のあるやらんと、幸亭丸も人々の中に交りて、其處の御堂に赴きたり。こゝには、辯舌爽になる僧ありて、法然上人の御一代を語るにぞある。其の說く所によれば、此の御傳記は、今より百二十年の昔、後二條院の勅命によりて、圖繪せられたる行狀記なれば、名けて勅修御傳と申すぞ。僧はかゝる緣起を語りて、やをら一卷の繪卷物をくり廣げ、咳一咳して恭しく讀み上るなり。

童子十五歲、近衞院御宇、久安三年の春二月十三日に、千重の霞をわけて九重の雲に入る。造道にして法性寺殿の御出にまゐりあひ奉つる。小兒馬より下て道の傍に侍るに、御車を止められて、何國の人ぞと御尋ありたれば、送りの僧事の由を申し上ぐ。御禮儀ありて過させ給ふ。供奉の人々存外の思ひをなす。後に仰せられけるは、路次に逢ふ所の小兒、眼より光を放つ。いかにもたゞ者にあらざ

るを知りぬ。これによりて禮をなしき。どぞ仰せられける。月輪殿の御歸依淺からざりけるも、此御物語を、御耳の底にとどめられたる故にやありけん。とおぼつかなし。

十五歲の童子といふは、久米の押領使神戸の大夫淡の時國が遺兒、勢至丸が事なりけり。幸亭丸は心耳を澄して愼んで聽聞して在りしが、是に至りて慨然として起ち立れり。眼をきつと睜り、口を一文字に結びたるまゝ、並居る信徒をかき分けて、堂を下りて走り出でぬ。走つて僧道の上に出れば、老たる杉のむら立つ間より、我が本願寺の御堂の甍は散見せり。幸亭丸はその眸を直ちに天に放つて、拳を握つて私語けるなり。

『法然上人何れの歲ぞや。彼も十五歲。幸亭丸何れの歲ぞや。此も十五歲！』

思はず聲の高くなりしに、驚きて四方に眼を配りしが、幸ひにして誰聞き尤むる者はなかりき。慧しき眼には欣然として笑みを浮べ、桃の如き美しき頰には、深く笑渦を印したるまゝ、勇氣に富める足踏み聽かして、揚々として我が御寺へぞ歸り行きた

る。

寔に幸亭丸の言つし如く、法然上人も三五にして有爲無常の理を覺知し、速かに菩提の道に通入したり。彼此一體の妙機を得たりけん、幸亭丸もこゝに高祖の教風を宣揚し、淨土の眞宗を興隆せんため、切に請うて學問を修むるに至りぬ。是れ實に正長二年(九月永享と改元す)の春なりき。

越えて三年、永享三年辛亥の春となれば、幸亭丸の齡十七に達したれば、乃ち先例の如く青蓮院の門室に入らしめ、當時の門主尊應准后に就て、法の如く髮を剃除し、滯りなく得度を遂げ果たり。養父廣橋中納言の偏諱を授かりて、名を兼壽と改ため、法號を蓮如と稱ふ。また別に院號を授めて、信證院と稱する事となれり。本願寺歷代にして、生前に院號を稱するは、未聞不見の事なりしかば、此の新例こそ、定めて宗門繁昌の瑞兆ならめとて、心あらん人々は、心竊かに相喜びしとなり。

爾來已還、兼壽は全心を學問に專らにし、三觀四教の台風を學する傍ら、法然上人も底深く分け來たまひ、祖師聖人も履み來し給へる、聖道難行の自力教を究むるために、南北の學匠に教へを受け、遂には南部興福寺の法相を學修すべく、一乘大乘兩院の門主を訪ひ、特に大乘院門跡經覺僧正は、報恩院關白九條經教公の息にして、學德一世に秀でたれば、こゝに師弟の契りを結ぶに至りしなり。

南都の留學も年を經て、研精比びなく切瑳世に殊なりしかば、永享十二年、即ち兼壽が二十六歳の秋の季には、八萬四千の法藏、兼壽が目に觸れざる法門もなく、大小權實の教法、兼壽が指を染めざる典籍もなしと、人も稱へ我も許すに至りぬ。

時に京洛より急使到來して、兼壽に急ぎ歸洛せよと促がすなりき。

兼壽とても人の子なり、孝養の心は敢て人の後に落ちんとは思はず。祖父上人の慈しみ深き恩顏を拜して、奉承を缺きたる罪をも謝すべく、父上人の明し給はざる御心の恩愛をも、感謝したきは山々ながら、今大谷には、二人の弟と三人の妹ありて、今茲八歳の弟は、取分け繼母の寵愛を專らにし、其の威權何ものも及ぶなしとの事なるを、我が爲めに恩愛の圓熟を缺きもせば、悔うとも及ばざる過失なるべし。さる中に歸山せんも、心なき所爲ならずやと、流石に歸心のたじろかるゝぞ是非もなき。

再度の急使尋で來たりぬ。祖父巧如上人の老病以ての外に勝れさせ給はず、是非生前の對面をと仰せあれば、引き續きて御使を遣はされしなりといふ。兼壽は直と胸塞がりて、今は何をか顧慮すべき、穿き熟れたる草鞋踏みしめ、一蓋の笠を深く被りて、手馴の杖を突き鳴らしつゝ、心も空に都路を喘ぎ走れり。

諸行は自力にて頼み奉りてこそ、他力も現はるゝなれと立てたり。此一流は始終ひしと他力なり。一心に彌陀を頼むも、我賢くて頼むにあらず、過去の宿善によりて頼む故に、始め終り皆な他力なり

（山科連署記）

第三　黑木の灯

大谷本願寺第六代の宗主、大納言法印權大僧都玄康巧如上人は、奈良より走せ歸りたる愛孫、兼壽法印蓮如の看護に滿足して、歳の十月十四日といふに、怡然として圓寂の相を現じ、やがて開維を行ふて、證定閣と法諡し奉つれり、世壽六十九とぞ聞えし。是に於て嗣法圓兼法印は、百箇日の法養果るを待つて、永享十三年正月（二月嘉吉と改元す）起つて第八代の寺務を繼ぎ、存如上人と稱せらるゝに至れり。

此時繼室海老名氏の胞には、蓮照、蓮康の二男兒の外、去年新たに玉の如き女子を擧げしかば、今は男女六人の子ありて、御堂の閑寂なるには似ず、廊下一つを境ひとして、內亭の花やかなること、不斷の春を占むるかと疑はれぬ。されど、蓮照は尚ほ九歳にして、法務を輔くるには、餘りに稚きに過ぎたり。殊には巧如上人遺訓の旨もありしかば、兼壽法印の嗣法たることは、何の故障もなく定りて、御方樣の尊稱の下に、法務を補佐すべき身とぞなりぬる。されば、今は常に本山に在りて、輕々しく斗

籤の行旅を試むることをも許されざるのみならず、新門主として其の位に備はる上は、身一つにては叶ふまじとて、遂に室町將軍家の權臣、伊勢因幡守平貞長が次男、下總守貞房の嫡女を迎へ、裏方に据うる事となりしかば、兼蓉が佛道修行の境遇は、已むなくこゝに終りを告ぐるに至りしなり。

靜かに世の光景を觀ずるに、南北御合體在ましゝより、御宇は三朝を累ね、年は四十八年を經、足利將軍は既に六代となりて、今の將軍家は、義圓僧正と申して、青蓮院の座主にて在りたるを、去ぬる正長元年三月、義持將軍薨去のゝち、御世嗣の公在さゞりしかば、座主御舍弟たる俗緣によつて、還俗して義宣と稱し、兵馬の權を綜べ在しゝが、翌年三月將軍職の宣下あり、名をも義敎と改めて、六代の大樹とは仰がれしなり。內外の典籍に眼を晒して、文事には造詣深く在すれども、武備には自から疎き嫌ひなきにあらず、關東管領足利持氏朝臣の如きは、執權上杉憲實と確執を生じて、既に事あらんとしたりしを、將軍僧周鳳に命じて和睦させ給ひたるに拘はらず、只管將軍の武威を輕んじて、更に兵を起して憲實を白井の城に圍み、揉みに揉んで攻め立てたり。將軍も一族なりとて捨て置くべきにあらねば、宣旨を請うて討伐せしめられしにぞ、流石の管領も今は詮ん術を知らず、窘窮の餘り、髮を剃つて降を乞ひ、遂に鎌倉永安寺に於て、自殺して事全く熄むを得たりき。

されども、之れが爲に將軍の武威は赫きしにあらず、竊かに還俗將軍と陰口して、武士の心は自から管領家に傾き、或ひは斯波氏に倚り、或は畠山氏に附き、又は細川氏に趨りて、一家一門の安泰を顧はざるはなく、將軍の威重、今や管領家に歸する傾向となりぬ。然る時に關東より早馬來りて、結城氏朝、持氏管領の御恨みを散せんために、春王安王兩公達を奉じて、兵を起したりと注進したりき。時に永享十二年八月なりしが、都方にても容易ならぬ事に覺えて、早速氏朝誅伐の令を下し、四天王法を修して、兇徒鎭撫の祈禱を凝らすなど、更に安き心とてもあらざりけり。此の戰ひは、翌嘉吉元年四月に至りて、結城勢散々に討ち破られ、氏朝の戰死、春王安王の誅戮によつて、幸ひにして天下輿論に歸したりと思ひきや、こゝに忽ち由々しき一大事こそ出來したれ。

播磨白旗の城主赤松滿祐、頃日深く將軍を恨み奉つりしが、六月廿日餘の夜、申樂を催して將軍を我が館に招き參らせ、無殘にも弑し奉つりて、館には火を放ち、兵を擧げて白旗城に籠りたるにぞ、山徒の外に絶えて騷すものなかりし京都は、今にも兵馬の巷どやなりなんとて、上を下へと騷動し、白旗城に向ひたる官軍の、凱歌を奏して師を旋せるのちまでも、永く不安の胸を擦り得ざりしこそ、乃て世の亂れぬべき兆なりしか。

不夜常樂の平安の都は、無常速疾の火宅と化して、庶民一日も安堵の想ひなかりしかば、生死の間に彷徨ひながらも、宮寺の利益に縋る信心も出でず、唯だ目の前の小康にのみ齷齪すなれば、唯さへ衰運に傾きたる本願寺は、朝夕こゝに足を運ぶ信徒も多からず、可通入路の大門は、徒らに風の出入るに委せ、御堂の向拜にも、後世願む人の蹤音を聞かざる日さへありて、あはれ一向專修の道場も、法燈自から滅するに至として、兼蓮法印が心の底には、炎焰の如き熱き涙の、滾り溢るゝを制め得ざりき。

『他力易行の法門は、末代の劣機を鑑みて、攝取不捨の誓願を發し給ひし、凡夫往

生の眞教なれば、今ぞ弘通の時機なるべきに、教法地に落ち、一流の正義全く廢頽して、かばかり御堂の荒涼を招きし事、悲みても尙ほ餘りあり、歎いても尙ほ足らず。嗚！　これ誰の過ちぞや？』

朝夕勤行を奉仕する毎に、無碍光如來の寶前に伏し、祖師聖人の眞影を仰ぎて、兼蓮は悲歎の涙にくれつゝ、深く我が身を責むるなりき。

『聖凡固より同じからずとはいへ、我等の如き不肖愚劣の者が、世に多く在るべしや。倩々法然上人の立どころに餘行を捨て、專修念佛の門に入り、四明の巖洞を出て、吉水の禪扃を開き給ひし時を思ふに、平家世盛とはいひながら、清盛の暴威其極に達して、後白河法皇も其心を和らげんため、故らに嚴島へ御幸なりし翌年にして、天下の人心は漸く平家を離れたる折にてありき。また開山聖人の東關に眞宗を興隆し給ひしは、鎌倉の權勢北條家に歸し、承久の逆亂を經たる後にして、武士も土民も安堵の念ひなき時なりき。有爲轉變の定めなきこと、朝にして夕を測られざる世の中こそ、法の弘まり給ふ最上の機緣なるべく、母上の御遺訓にも、頼りなき世に在る人ほど、

後世を恐るゝ者なければ、かゝる人を教へ導くこそ、當流興隆の基なれと、呉々も仰せ聞けられたり。我等勿體なくも聖人の嫡孫と生れて、偶〻、御一流再興の妙機に會ひながら、言ひがひなく廣宣流布の法を知らず、却つて御堂の衰微を招くこと、空恐しき不肖の罪、何を以てか償ひ得べき。如來に對しては不忠の奴、祖師に對しては不孝の子、あら畏しや、あら愧かしや』

机に對つて聖教を讀誦する端にも、兼壽の心にはかゝる恨悔の往來して、我知らず口に漏らして、坐に涙の痕を留むるなりき。

近き冬の寒氣を凌ぐ料にもと、傍に在りて紙衣を綴くる裏方は、思はず糊目に涙を落して、慌てゝ密と目を押拭ひぬ。

『左やう御力を落し給ふこと、つや〳〵所謂候ふまじくや。御歳はまだ二十八、他宗の御僧にて在さば、御修行さかりの御年配なり。申すも畏き御事ながら、御開山様に致しても、隱遁の志にひかされて、吉水の禪房に尋ね參り給ひしは、二十九の御時に在します。今より志を立て給ひて、一人にても眞の信心を決定させ給はゝ、いつか御一流の弘らぬ事や候はん。先づ御氣を平らに持たせ給へ』

愛嬌づくりて柔和に慰むる裏方の、窶れたる姿を見ては、兼壽も之れを斥くる氣力もなく、涙持つ目を外部に反して、

『能く仰せ給はりしぞ。此頃の御堂の光景を見る度に、開山聖人の照鑒も懼しく、不肖の身の羞かしさに、愚痴の出ぬ日はなきぞとよ。一人にても眞の信を取らしなば、いつか御一流は弘まらんとは、何よりの教訓なり。我等も左やう思はぬにあらず、百人の空念佛よりは、一人にても御助け一定と信じて、報恩の稱名する者をこそと、由斷なく心を配れども、參詣の門徒なければ、法話すべきやうもなくて、空しく今日までは過しゝなり。此處に居て待たばこそ、法を說く便りはなけれ、斗籔行脚の姿となりて、我から進んで化度したらんには、十日にして一人を得、百日にして十人を得ること、さまで至難しとは思はへず。去りながら、こも父上人の御許しを得し上ならでは――』

顧みてうち笑む面の、言ひ知らず寂しきに、裏方も頤を襟に埋めて、曇りし顔を俯

向くるなりき。

野分に傷める糸萩の如く、細き頂を垂れがちにして、手元を職めて運針に餘念なき裏方の、肩のあたりの波うつやうに跳るを見て、兼壽は密と涙を啜りながら、

『九月もまだ中旬なれば、その紙衣に寒を凌ぐには、一月餘りの猶餘あり。少し手を休め給へ。母上の仰する通りならば、卿ははや臨月なるべし。氣根を凝らして分娩の障りともならば、紙衣一枚には代へられまじ』

『仰せの通り臨月なれども、お胎の兒はいと行儀よく、起居にも苦しむ事は候はず。況てかく坐りての仕事なれば、產の障りとなる事も候ふまじ。御方樣の絕えず聖敎を御覽するに、妾の手を空しうしては居られねば』

『我等の聖敎を讀むことは、我等が第一の務めにて、是非とも聖敎を讀み破り、祖師の御旨をそのまゝ心に移さん爲なり。初めは百遍讀みかへせば、其意自から通ずべしと思ひしが、今は千遍繰りかへして、祖師の御心を伺はんと思ひ立ちたり』

『百遍と承ばりてさへ、妾如き下根の者には、胆潰れて候ふものを、千遍とは、只

だ驚くの外候はず。さほどに思し立ち給ひし、御志しの彼土に通じて、御開山樣いかばかり御悅び遊されん。あら賴もしや、南無阿彌陀佛』

裏方は針を止めて、其の掌を合するなり。兼壽も俱に念珠を繰りてありしが、更に膝を裏方の方に向け、

『白すさへ心苦しき事ながら、我等かくの如く貧窮にして、小厠一人だも得使はねば、重き身もて朝夕の勞動、嘸かし辛勞の事ならん。就ては、知らるゝ如く上人の方には、內衆五人まで召使ひ給へば、此の內一人遣はされても、御用の缺くることはあるまじ。今朝も上人の御仰せに、出產も程なしといふに、人手なくては何事も不自由なるべし。此方の內衆の內小厠一人參らさん程に、遠慮なく召し使へとの御事なりき。卿の心次第にて、明日には雇ひ參るべし』と、密めがちに語り出しぬ。

裏方は目の裡に涙を浮べて、慇懃に頭を低げぬ。

『上人樣御仰せ、承はるばかりにて、染々難有く思へ侍る。去りながら、此方の御手元の都合も候らへば——』

『その事なり。父上仰せらるゝやうは、餘の者は年長たれば、心安くは使ひ難し。竹若ならば子飼より勤仕する者にて、年分鳥目五十匹も與らすれば、餘の心付も無用なり。所用とあらば、彼者こそ可からめと、夫れまで御心を勞させ給へり』

『勿體なや、給銀の事をまで御心に懸けさせ給ふか。五十匹三十匹が程ならば、何とか出來ぬ事もあるまじ。さらば竹若御雇ひあるべくや』

『如何も年分の給銀なれば、また才覺の途もあるべし。さあらば雇ひ申さん』

本願寺の法嗣は、鳥目五十銅の支出をも、かくして夫妻相談を重ぬるほど、爾く物資に乏しかりしなり。その相談一決して、兼壽は聖教を、裏方は紙衣を、再び手に取り上げたる頃には、秋の日の吊瓶おとし、落暉西山に深く隱れて、はや黃昏の文字も針目も見え分かざりけり。

『灯火なくては聖教も讀み難し、油は猶ほ殘りしか』

兼壽の薄き明りを辿りて、空の方に目を放てば、裏方は忙はしく座を立ちて、持ち來たりしは油壺ならで、唯だ一握りの黑木なり。

『油は一滴も侍らねば、月待つ間をこれ燒いて御覽候らへ』

裏方は手早く黑木を折り焚べて、口さし寄せて火を吹きつくれば、小枝に移りて颯と燃上りぬ。

兼壽は欣然として、この火光に翳しつゝ、心眼を聖教の上に凝らせり。裏方も亦この光りを油に代へて、縫き指を密かに運べり。讀むこと幾丁、縫ふこと數寸、山風颯とおとし來て、黑木の一時に燃え上がるかと見れば、崩るゝ如く火は碎けて、唯だ空しき灰の中に、消え行く餘燼を見るのみなり。

月いまだ登らず、夜は全く暮れぬ。夫妻は仄かに相顧りみて、互ひに苦笑を交換するのみ。蟲の聲細く寂びたり。

第四　東國巡禮

『さて〳〵是はいかな事、御方様ども在るべき御身が、左やうな汚物まで、手を下して浣がせ給ふやうやある』

廣綠より飛び下りて、今兼壽が汲み上げんとする非筒の下に走り寄り、吊瓶を奪ひ取りたるは、近江の國金ケ森より上洛したる道西なりき。

奪はれたる吊瓶を彼方に委せて、兼壽は浸したる布を滌ぎながら、莞爾として道西を見やりつ。

『御坊は何時上洛せられしぞ、餘寒の厳しきに、内にも別に障りはなきや』

『難有き仰せを承はり、道西面目身に餘りて候ふ。何はさておき、御裏様御安産、若君御誕生のよし承はり、直にも御慶びのため上洛とは存じながら、私事のために其の意を得ず。また報恩講には何事を措きても、準備は致せしもの〻、是れすら心底に任せざる事候ふて、年頭の上洛さへ、今日まで延引に及びしこと、道西が近來の不

幸ひに宥させられ候へ』

走水の石に手を突きて、道西はそこに聞き顔を頷づくなり。兼壽は氷りの如き濕布を搾りながら、

『其の砌は、心にかけさせられ、遙々音物を贈られたる條、懇志の程謝し申す所なり。かく人々の加護を得てにや、出生の男兒もいと健かにて、日野殿より光高丸と名を賜はり、今は母の懐に安々と睡り居れり』

『そは一段の祝着にこそ。さるにても、御方様の御手づから、かゝる物まで洗濯させらるゝこと、餘りと申せば勿躰なし。竹若はいかに致して候ふぞ』

道西は法衣の袖を高く捲りて、精悍しく水を汲み上げ、自ら代つて洗はんとするなり。兼壽は事もなげに手早く搾り果て、樹間にひき渡したる綱にかけ列ね、其の手を清水に浄めなどす。彼處の窓より嬰兒の泣く聲漏れて、忍びやかなる咳嗽の聲の、うち交りてぞ聞え來にける。

兼壽は紫色に凍たる手を拭きながら、

『彼の嬰兒も、開山聖人の道を紹ぐために生れ來し者なれば、我が兒にして我が兒にあらず。されば彼の嬰兒を育むために、箇樣の事を致すのも、是また御用の一端と思へば、我等は曾て苦痛など思ひたる事はなし。彼の竹若は、我等が小便ながら、元來上人の御内衆を、貸し遣はされし者なるに、何とて光高丸の汚物まで滌せらるべき』などうち語らひつゝ、午尙ほ霜の白く置ける、寒き庭を廻り廻りて、我が住む方に道西を伴ふなりき。

この金ケ森の道西といへるは、祖師眞實の敎法に信順して、一向專修念佛の行を守る、當流隨一の門侶にして、斯く年々に衰へ行く大谷殿を、我が道の主家と敬ひ、常に參向を怠らぬ者なりき。兼壽も彼が誠實の志を嘉して、存如上人に伺候の折節、陰より密と招き寄せては、凡夫成佛の法文を說き聽せ、懇篤に物語りしたりけるに、道西謹んで承はり、新門主の法話のまたなく忝けなさを感じたればや、年に二度三度も上洛して、常に新門主の方に參入しては、微妙なる淨土の物語りに心耳を澄し、大いに法義弘通の志を助けんとするなりけり。

兼壽法印の裏方伊勢氏は、嘉吉二年壬戌の十月、安々と初產の紐を解きて、麗はしき男子を擧けたり。光高丸と名づけて愛育するに、この兒の不思議なること、其の周珠を伸べたらんが如く、その色淸白にして、自から光澤あり、人々光高丸の名の、偶然ならざりしことを、語り合ふばかりなりき。

かゝる奇瑞を目のあたり見たる人々は、兼壽法印の母公の化人にてありし證據を、今見出したるばかりに言ひ做し、應永廿二年二月廿五日、この法印の誕生ありし時、單瓣となく重瓣となく、山の櫻の一齊に咲きたることなど語り出て、この兒の出で給ふこと、定めし大谷御繁昌の瑞なるべしと喜ぐなりき。此の事內亭に漏るゝや、存如上人こそ末賴母しと思し召しけめ、海老名の方の心には、深く望みを失はれたり。蓮昭は兼壽より十九歲の弟にして、やがて法嗣に据らるゝとも、相應しからぬ齡ならねば、存如上人退隱の後は、蓮昭こそ新門主なれと、固く思ひ決めたりし事とて、光高丸を愛で稱ふる祝言は、直ちに吾が兒を呪ひの聲となりて、修羅の燄の心を焦すばかりなりき。

それかあらぬか。新門主の内室は、新發智誕生のために、却つて必迫となりて、竹若に遣らすべき五十匹の鳥目さへも、今は中々如意ならぬ手元となりぬ。兼壽の身には、綿の入りたる小袖をも着くること能はず、紙衣を襲ねて寒を凌ぐに過ざるに、裏方は是等の苦勞が病ひとなりて、臥床を離るゝことさへ叶はず、嬰兒の汚物までも、兼壽自ら洗濯するにぞ、手は凍瘡にて赤く腫れ、胼は風に口を開らきて、其處より血の流るゝなど、是れが念珠爪繰りて、御佛に勤仕し給ふ、本願寺の新門主の御手かと思へば、伊勢の方は徒らに胸のみ痛みて、いつ病ひの癒たるべきかも、見分け難く思はれたり。

道西はこの光景を見奉つりて、我が身の冥加を恐しと思ひぬ。裏方の御病症は、藥石の効驗によつて、御平癒の望みはあれども、新門主が回天の御志は、かくていつしか達し給ふべき。賤しき業をも毫厭ふ御氣色なく、是も御用の一端なりとて、潔よく行ひ給ふ御心根、春の海より尙ほ穏かなり。此の上人の御爲には、いかにも犬馬の勞に服すべきぞと、衷心より歸依したりき。

光高丸の甫めて三歳となりし年、即ち文安元年に、裏方再度の分娩によりて、第一女如慶尼誕生あり。同じき三年第二男兼鍼逝乘出生せり。兼壽は三十二歳にして、今は二男一女の父となりしも、内證の賄ひは、聊かも增すよしあらねば、道西が勸めに委せて、久々にて狎れし草鞋に脚を固め、檜木笠に身を被はせて、近江の國に遊化を試むるに至りしなり。

金ケ森にては、道西の馳走によつて、近郷の道俗を集め、兼壽に一條の法話を要めしにぞ、即ち何人の耳にも入り、意に會得せらるゝやう、和らかに聖教の意を解きて、手を把つて物語りをするが如くに、懇ろに凡夫直入の法門を諭し教へたり。是れ兼壽が聖教千遍の願を發して、多年心を碎きたることを、遺憾なく試みたるなり。兼壽が熱誠は、いかなる頑愚をも度さずには措かざるべく、兼壽が智辯は、いかなる文盲をも了解させずには措かざるべし。

これを第一次として、年の内に三度まで遊化を試み、明る四年の春、またもや金ケ森に錫を巡らして、一流の平易簡明なる布教をなし、口より耳に吹き込む如く、親鸞

聖人の一義を說きて、

『彌陀如來の本願を深く信じ參らせ、一心に二心なく、彌陀一佛の悲願に縋りて、助けましませと思ふ心の一念の信まことなれば、必らず如來の御助けに與るものなり。此上は、今の信力によりて、往生は一定なり、罪業の身を御助けありつることの忝なさよ、是が報恩謝德の爲には、我が命のあらん限り、念佛申すべしと思ひて、怠たらず稱名申すべきなり。是れを安心決定したる信心の行者とは申すぞかし』と說きたる時には、道俗老少皆な一樣に涙を流して渴仰したりき。

說法果てのち、奥にて休息してありしに、近きわたりの童子なるべし、幼き者の多くうち集ひて、他念なく狂ひ遊ぶさまを、兼壽はつく〳〵と見てありしが、今茲やうやう六歲になりし光高丸に思ひ比べて、流名に興を催したり。其中に一人利發らしき童子の、自から頭立ちて見ゆるがあり。兼壽は其の童を指して、

『彼の童誰が子ぞ』

聲の下より道西畏まりて、

『私の甥にて候ふ』

『利根さうの者にて候ふは。我等にくれられまじくや』

道西に何の違背かあるべき、即座に領承して、

『難有く候ふ』と額づきあへず、彼の童の手を把つて差上ぐるなりき。

當時、道西の肝煎によりて、兼壽の布敎漸く根をおろし、大谷の御堂にも、珍らしき參詣の男女を見るに至りて、當流の法義かつ〳〵弘らんとする望みを生じたりしも、兼壽が內證は更に饒なるにあらず。長女は吉田攝受庵の發ひ分として、二男は南禪寺の僞食にすべき約束にて、孰れも里に出し、唯光高丸のみ手づから養育するに過ぐも、竹若に與らすべき五十匹さへ、或は三十匹、または十匹より外得出さゞる事すらありて、已むなく上人が方へ返されたる事、道西の能く承知する所なり。されば、道西はこの小刷によりて、法印をも裏方をも、少しく樂をさせましたしとて、彼の甥にも申し含め、直ちに法印の歸洛に具して、大谷殿に仕へしめたり。

後年、畿近親侍の高弟として、山科連署記の第一筆に署名したりし慶聞坊龍玄は、

此の小厠の後身なりしなり。

金ケ森の遊化に力を得たる兼壽法師は、開山聖人の靈蹟を歴訪して、いかに一流の興隆に酸辛を嘗め給ひしかを、身親しく其の境に就き、備さに究め試みばやと思ひ起ちぬ。北陸は左遷苦楚の跡蹤ながら、眞宗興隆、法流源泉の芳躅は、東關の國々に多ければ、先づ東海道より巡禮すべしとて、此の義を父上人に願ひ出でたり。存如上人も別に異存を挾むべき事ならねば、丹後に命じて費用を調達せしめけるが、本願寺の内證は、今は路用の足し前をも支出すべき餘地なかりき。

兼壽は太く力を落しぬ。固より修行の旅なれば、從者とても多くを要せず、行く先先にて説法をもし、寺院に就て宿を乞はゞ、費とても省かるべきに、力の及ばぬ次第なるよと、寢食までも減するばかり、深く思ひ艱らひたるなり。

此の事人の告るによりて、金寶寺の明照法師、殊の外氣の毒に思ひ、侍僧教俊に就て、路用として猛眼三百匹、賄調度として金五枚を獻上したりしかば、兼壽は粘骨に窩を得たる心地して、是歳五月、都を出て東路の旅に上れり。隨從の人數も次第に加

はりて、教俊の外に、仰願寺の良珍も加はり、侍者として下間法橋等、上下一行十八人、本願寺の新門主としても、恥かしからぬ行裝なり。

行き〳〵て三河國岡崎の里、柳堂を拜しつゝ、聖人一座の説法によりて、三大寺の長老即坐に慢憧の頭巾を脱ぎ、一向專修の念佛行者に歸して、こゝに三河三門徒の繁昌を懐べは、祖師の高風あり〳〵と目に映じて、盛涙自から流れ出づめり。

こゝより佐々木上宮寺に杖を曳きしに、大坊主如光、途中まで出で迎へて、驩んで請じ入れつゝ、初見參の款待しなか〳〵に慇懃なりき。

兼壽つら〳〵此の如光が風骨を見るに、身長六尺に餘りて、容貌の魁偉なること、何さま世の常の法師にあらず。試みに此國の教風を尋ぬるに、音聲清澄にして、辯舌も亦爽快なり。此の法師、措むらくは專修念佛の眞相を知らず、このあたりに行はる秘事法門にこそ囚はれざれ、稍もすれば雜修に流るゝ傾きなきにあらざりしかば、兼壽はこれが爲めに、易行淨土の眞門を説き聽かせ、一向專修の念佛行者たる正路に導き道はしぬ。

然るに如光は、一言にして、聖人の眞教を感知し、深く兼壽の法德に歸依して、忽ち面授の一弟子となれりける。その頓悟機智、文珠のそれかとぞ思はれければ、兼壽は私かに彼が人と爲りを聽きて、小膝を拊つて點頭たるなり。

事質聊か荒誕の嫌ひなきにあらねども、姑らくこゝに其の一班を語らしめよ。

過し頃、當國の鄉士に椙浦三郎左衞門といふ者ありき。元來眞宗の歸依者にして、上宮寺の門徒なりしが、一時上宮寺へ詣でばやとて、油ケ崎といふ處を通行したるに、道の傍に積み上げたる塵塚の上に、六歲ばかりの兒の餘念なく遊ぶ者ありけり。親やある、友や來たると、四邊隈なく見渡せども、それぞと思ふ人影もなく、正しく小兒は只だ單身にてこゝに在るなり。此の油ケ崎は、人家とてもなき磯端にして、今こそ干汐の磯は遠けれ、一朝潮の滿ち來たらんには、巨濤跳つて捲き去るべきに、危うかりし事かなと、三郎左衞門は塵塚より抱き下して、此の兒の手を携へつゝ、上宮寺に詣づる途次も、諸人に視せて、親を尋ね、友を求むれども、誰あつて知りたる人に遭はざりけり。上宮寺の住職も不愍に思へば、左も右も拙僧預りて扶持し候はん、親々

の定めて尋ね迷ひなんに、觸れ知らせて遣はさるべしとて、其の儘兒を預りたり。されども、兒は三郎左衞門の跡を追んともせず、また親々を慕ひ慕ふこともなくて、能く住職に親暱み、その狀極めて愛らしかりしかば、住職の不便いや增して、試みに經偈を敎うるに、一遍にして之れを諳んじ、また手習を授くるに、倦ずして能く覺えぬ。其の性極めて聰明にして、また極めて溫厚なれば、住職は好き法嗣を儲け得たりと、深く彼を鍾愛したりき。

程經ての事なりしが、彼の椙浦三郎左衞門參詣の序を以て、先年の兒、親兄弟も今日まで明らかならねば、我等が方にて發ひて得さすべし、還し候へと言ひ出でぬ。住職以ての外の氣色にて、親の生死も明らかならぬ孤兒なれば、佛道に身を獻げて、出家得度するこそ、後生安樂の道なりけれ。されば寄り〳〵學問をもさせ、追ては當寺の後住たらしめんとて、心を盡して育てゝ候ふ。扨て拙僧に賜はるべし、緣なき事を申すにあらずと、强て所望したりしかば、三郎左衞門も今は異議に及ばず、左ほどまでに思召す上は、御弟子に差進すべし、あはれ善き法師にし給へとて、この孤兒は、

遂に佛弟子となりけるなり。

先住の見る所違はずして、此の孤兒博覽強記にして、口才明達遙かに師に優り、國内無二の沙門となりぬ。加之膂力強く膽氣勝れて、勇を以ても隣國に比ぶ者なく、海道一の俠僧と稱へられて、今は三州の名物に立てらるゝに至れり。

上宮寺如光の前身は、かくも奇異なる事蹟を有しぬ。怪を好む世の人々は、この大坊主を化人と稱へて、深く尊信するなりけり。

一、安心とは彌陀を一向一心にたのみ申せば、やがて御助けあるなり。されば、こそ安き心とはいふなり。

實に安きなり。

（連署記）

第五　北國行脚

函嶺の嶮を踰えては、靈夢の奇端に感き、國府津の濱を過ぎては、石の名號の眞蹟を拜し、板敷山の峽路を歩みては、修驗瞋毒の害心を鎭へして、佛道の眞敎に歸した る德を懷び、稻田禪室の聖蹟を踏みては、幽栖を占め蓬戸を閉ち給へども、貴賤道俗跡を尋ね衢に溢れし、衆生利益の廣大なることを味はひて、直宗興復の志を奮ひ起し、尙ほ常野の舊址古跡を巡拜して、一先づ花城の本廟に上り復りたり。

歸りて見れば、光高丸は見違へるばかり大人しくなりたるが、伊勢の方の懷裏には、またもや第二の女兒ぞ抱かれける。旅にて年を越したれば、紀州北山に旗を擧げて、五年以來官軍を苦しめたる南朝の遺臣も、知らぬ間に盡く亡びて、京師は珍らしく靜謐の春を迎へ、我にも麗はしき女兒を授かりしかど、兼嘗の貧は、却りて甚だしくなるまでも、聊かたりとも寬げる所なれば、またもや涙を呑み、愛を割きて、吉田の攝授庵が徒弟に與へたり。この攝授庵は、淨土宗清淨華院派の尼院にして、現庵主見秀

尼は、巧如上人の長女、即ち兼壽が伯母なりしかば、第一女をも養ひて徒弟となし、今また第二女をも引受けて、養育の世話をなし與ふるにぞある。

かゝる中にも、僅かに兼壽の心を慰めしむるものは、近江、美濃、尾張、三河あたりの門徒の、菲洛に上りたる序を以て、大谷參りと稱して、本廟を拜する者の、月々に其の數を增し來つる一事なりき。寺門の衰頽こゝに至りても、門主直々の對面といふことは、下間衆などいふものありて、容易く整ふべき事ならねども、兼壽としては、いかにも門徒の篤志を空しうするに忍びず、遠來の人々には、密かに御堂に出て接見し、親鸞聖人の立て給ひたる往生の一義を諭して、一向專修の念佛を勸めたりしかば、一びび兼壽の親授に接せる人々は、皆な堅固なる安心を決定して、隨喜渴迎して下向するを常としたりき。

金ケ森の道西は、例の如く存如上人の方に伺候して、やがて兼壽の方に來り、御堂の戸張も綿の光り鮮やかに拜まるゝばかり、御繁昌の徵の見え來つるは、偏へに御方樣御行化の爲めなるよしを稱へたりしに、兼壽は忙はしく手をうち振りて、

『開山聖人は、某は全く弟子一人も持たず、其故は、彌陀の本願を保たしむる外は、何事を敎へてか弟子と號せん、彌陀の本願は、佛智他力の授け給ふ所なり、然れば皆な友の同行なりと仰せられて、御自身は彌陀の御代官と思召されて候ふぞ。蓮如はいまだ祖師の御代官をも承はり申さず、いかでか行化の効や候はん。設し本山に參詣せらるゝ、善男善女の、足繁くなりたらんには、是れ彌陀超世の悲願、再び光りを放ち給ふべき機緣の熟せる兆にて、世の爲め人の爲め、誠に難有き事にては候はずや』と言ひ消したり。

道西は双の手に面を覆ふて、感涙を仰へながら、鼻塞らせて言へり。

『凡夫往生の直路たる、御宗風の再び弘らせ給ふべき、不思議の機緣に遇ひ參らする道西は、何たる果報者に候ふやらん。是につけても報恩の御念佛を、懈怠なく申しなんとこそ存じ候らへ』

『實にそれよ、蓮如も然は思ひ候ふなり』と、少し〳〵首をさし出して、聲を密めて語り續けぬ。

『さるにても、朝夕御堂に勤仕する毎に、我が氣に入らぬ物を見ては、開山聖人の照覽在しまして、いかばかり歎き思さるべきかと、身を責めてあさましさ限りなし。かゝる物の有らうする間は、聖人の御流義の再興とは申し難からんか』

顰めたる眉のあたり、不快の曇に包まるゝを見て、道西は俄かに胸を悸がしながら、恐る〳〵問ひ試みぬ。

『さまで思召しに悔はせられぬ物おはさば、丹後に仰せられて、直にも取除がせ給はゝ如何』

兼壽は苦々しき顏色ながら、微かに笑みを含みて、

『取除くるは易き程の事なれども、除けたる後には、始末のならぬ法難の出來すべし。是れぞ一段の苦勞なるは』

『さて〳〵面倒なる邪魔物にて候ふよ。そは何ど申す物に候ふぞ』

『須彌壇の莊嚴なり。台密の護摩壇なり。一乘の經卷なり』

斯く承はりたる道西は、瞠りたる眼をくる〳〵に轉して、したゝかに太息吐きたり。

兼壽はさもこそと點頭きて、無念の豁涙さしぐまるゝ眼を閉ぢたるまゝ、慨然として說けり。

『開山聖人は無碍光如來一佛を賴み奉つりて、至心信樂を旨とし、雜修ど餘行とを排け給へり。我等とても此度の往生は、如來の本願に助けられまゐらせて、一定するよと信じて、深く歸命し奉つり、御助け難有さよと感謝する心もて、南无阿彌陀佛ど稱へ奉づる外には、更に以て何事をも存せず、また人にも此事より外には、一言も勸めたること候はず。若し我等の思ふ所眞ならば、阿彌陀如來は信をこそ採り給へ。いかで祈禱加持を受け給ふべしや。然らば、須彌壇を飾る種々の佛器は、何の料に供ふるやらん。また焚きもせざる護摩壇に、數々の法具を整へて、何の利益ありとするや。つや〳〵以て合點仕つらず。殊に淨土には三部の敎典あり、我が宗は專ら大無量壽經に由る、何ぞ一乘妙典を備ふるの要あらんや。供御を盛らざる器は廢器なり。法の用なき道具は贅物なり。況て卷をも締き奉つることなく、讀誦し奉つることだもなき經文を、徒らに蠹魚の食となしまゐらするは、敎典を瀆がし奉づるなり。凡俗なら

ばいざ知らず、佛徒沙門の身として、誰か恐るべき佛制のなしといふや。歴代の上人、かゝる視易き理りを知り給はざるにあらず、父上人も深く忌せ給はざるにあらざるべきに、尚且つかゝる慶聚贅物を列べて、よしなき威儀を繕ひ給ふには、深き故由なくては慨ふまじ。道西は如何思ひ給ふぞ』

屢〻唇の慄はるゝは、滿腔の無念の逆しればなり。時に聲の微るゝは、全身の熱涙の泡ればなり。道西は年壯氣鋭の法嗣の君が意中を推して、所詮一言隻句たりとも、口外すべき辭を有せざりしなり。

兼誉は兩眼をくわつと睜らきぬ。眼底には紅く血を堪えて、睫毛に列なる涙の珠よりは、一粒毎に湯氣の發するかと疑はる。

『嗚呼、是は勿論山門の暴威猛烈にして、虚僞にも天台の儀軌を具へざれば、忽ち破壞の業に出づるが故なりとはいへ、併しながら我が宗門の衰頽して、山門に反抗する力なきが爲めなり。蓮如は深く殘念に思ふ』

堰きかねたる熱涙の、雨の如く落ち來りて、紙衣の糊の濕びるをも顧みず。

『眞宗根本の道場なる、本願寺の御堂既に此の如し、遠國末派の門徒の、混濁せる宗義に誑惑せられ、解脱の岐路に彷徨ふは、是れ勢ひの自然とや申すべき。美濃より三河路に渉りては、越前の國に專ら行はるゝと聞く、彼の秘事法門の邪教流行して、善知識頼などいふ僞非秘事に惑はさるゝ者、年々に夥多しくなり增りたるとかや。其の人々は、念佛往生といふ事は、凡夫に後世の一大事を知らしむる、佛者の方便に過ずして、眞に極樂に生るゝことを願ふには、別に神秘の法門ありと信ずるなり。箇やうに外道の邪宗に惑はされ、生死の大事を誤ること、疑惑多き淺ましの衆生心とは申せ、職として當流の教旨の、衰へつる證據ぞかし。關の東は祖師開宗の聖境なれば、定めて掬取不捨の光明を悅びて、報恩の稱名里閭の間に連るべしと思ひしに、西衆上人の勸化盛んにして、其の功德雨の如く潤ひにけん、二十四輩などの門徒こそ淪らざれ、八州の草木は悉な淨土の宗風に靡き、一念彌陀のお助を仰ぐとき、佛の力より攝取せられて、往生決定することを信せず、至誠、深、回向發願の三心具足して、偏へに如來の本願に縋り、一向專念に名號を稱へ奉つり、行住、座臥、時節を問はず、日

所作に幾萬遍を申して、久近念々捨てざる者は、佛願力に乘じて、臨終正念にして往生をば遂るなりと信ずるにぞある。了譽、酉譽兩上人、引續きての勸化なれば、鎮西流の興隆はさる事ながら、是れに對して當流よりも、眞宗の安心を說き聽かせて、易行淨土の眞敎を流布したらんには、斯くまで祖師聖人御發祥の地を、荒らさるゝことはなかりしならんと、つく〴〵身の不肖を愧ぢて、面も得搖げぬ心地にて候ひしよ』

兼譽は東國飛錫の結果をして、深く心に刻まれたる祖風廢退の感慨を述べたるなり。

聲涙と共に下りて、心中に鬱勃たる悲痛の氣は、凝つて將に裂けんとはするなるべし。

道西はいつしか手を突きて、謹慎して承はりつゝ、一言を狹さむことも得せず、自から慷慨の念を禁じ得ざりき。

疾風林を過ぎて、萬物聲を呑むが如く、姑らく兩人の間には沈默の引續きて、その靜寂森林の底に潛むが如かりしが、頓てまた、兼譽は、壯心銳氣の血を煥かして、快濶なる色を現したり。

『久々にて上洛せられし貴僧に、よしなき愚癡を申したり。去りながら、當流の正

意を明かにして、專修念佛を弘通することは、我等の宿志なれば、斃るゝまでも此の行は捨て難し。就ては、迷惑ながら强て貴僧に賴みたき一義あり。聽き屆けて下さるべきや』

思ひ寄らざる語ながら、景仰する兼譽の依賴なるに、道西いかでか違背に及ぶべき、

『田舍坊主の物を心得ぬものながら、御賴みなくとも、身を粉にしても御用を務めんと存じて候ふ。御心措きなく、何事にても仰せ付け下されたし』

『早速の承引、身に換て忝けなく覺え候ふ。御許しを乞ひ受けて、此度は北陸道に下り、開山御左遷の御遺跡を尋ね參らせ、配所の御蹤をも懷び奉つらばやと存ず。伊勢殿はまたもや懷姙となりしといふに、光高丸の惡戲ざかりとなりて、龍玄は彼が保護に勞るべし。貴僧時々上洛ありて、我が方に心着け下さらば、我等少しも心を都に殘すことなく、緩やかに巡禮の志を果し候ふべし』

『さては再び北國御行化とや？』

道西は歸洛してまだ一年ならぬに、更に北陸道に行脚を試みんとする兼譽の、意氣

の壯んなるに感じ入りたり。

『北陸道は、當流宿緣の地なり。越前三門徒の事は言はずもがなれ。綽如上人越中井波に瑞泉寺を建立し給ひてより、本願寺の宗風漸く開け、綽如宗主の御二男、即ち巧如上人の御舍弟慈圓頓覺僧都は、越前藤島の庄に超勝寺を開基あり、後また加賀の津波倉に本願寺を草創せられ、御三男玄眞圓覺僧都は、同じく越前志比の庄荒川に興行寺を建立あり、其御息男永存師も、同國石田の西光寺に住せらる。現に叔父公宣祐如乘僧都は、越中瑞泉寺の第二世に備はらせながら、加賀の國二俣の山中に本泉寺を開基して、兩寺を兼董せらるゝなり。此内獨圓頓僧都こそ、一昨年の晩秋（文安四年）に御遷化ありつれども、興行寺、西光寺の御父子には、今尙ほ御健かに在すと申し、瑞泉寺の叔父公にも、久しく拜晤を遂げざれば、彼是就て御敎へも仰きたく、是非是非此の度の巡拜を、果さんと思ふなり。法養の暇ある折節、上洛ありて後見下さらば、我等此上の滿足は候はず。是非に、是非に』

事を分け理を盡して、意中を包まず物語りしかば、道西は胸をうつて潔よく承諾したり。此の然諾に兼濟の意は强くなりて、切に父上人の許容を請ひ、即ち寶德元年初秋の下旬、雁の來るてふ北國の天を望んで、斗籔の旅にぞ上りける。兼濟時に三十五歲、蓮聖人の俗名藤井善信と賜はりて、左遷の程に上られしと、齡を同じうしたりしは、一奇とこそいふべけれ。

一、世の中にあまの心をすてよかし牝牛の角はさもあらばあれと。これは開山聖人の御詠歌なり。されば形ほいらぬ事一心を本とすべしとなり。世上にも、頭を剃るといへども、心を剃らぬといふ事があるなりと仰せられけり。　（空善日記）

第六　傳燈の光

吹きかへす葛のうら葉の白きをも、はや置き初めし霜かと疑ひ、常磐樹の木の間に燃ゆる紅葉に、故郷戀ふる血を沸かせつゝ、行くもかへるも逢坂の關越え來れば、走水井の流れ心を澄まして、人の手ぶりも都びたり。長月とはいへ二十日を過ぎては、暮るゝに蚤き晷を惜しみて、息杖忙しく突きならし、都に急ぐ一挺の駕籠ありけり。

關の清水の彼方、此の駕籠の内をさし覗き、語を變はさんとする法師ありしが、駕籠の歩みの速かりしかば、物申す暇もなくして、脚を疾めて昇き去られしにぞ、忽ち駕籠の跡を追ひかけ、喘ぎ〳〵走せ續くなり。追分の此方までは、輙く追ひ縋ることぬ惟はざりしも、昇夫の草鞋の緒を踏み切りて、暫し駕籠を休むる間に、彼の法師は喘ぎ勞れし息を呑みつゝ、辛じて駕籠の前に馳け着けたり。

『御駕籠の内に申し入れ候ふ』

音なふ端に被りたる笠脱ぎ捨てゝ、其の上に兩手を突き、

『卒爾ながら、越中の國より東山大谷殿に御上洛の僧都の公と見奉つる。青光院樣にては在しまさずや』と、慇懃に問ひ試みぬ。

駕籠の内よりも、物見の翠簾をかゝげながら、

『我はいかにも瑞泉寺宜祐なるが、左やう言はるゝは誰ぞ』と、半顏を表はしてさし覗く。

『誠に青光院の御方にて在しませしよ、御見忘れ遊ばされしや、金ケ森の道西にて候ふ』

『おゝ、久しいぞや道西、足中も息災にて重疊なり』

『御院主樣にも御健祥に渡らせられ、恐悦の至りにて候ふ。此度御上人の御遷化、嘸かし御愁傷に在すべく、遠國御離居の上は、御骨肉の御痛み恐察申し上げ奉つる』

『存如上人獲麟に及ばれし事は、歎きても効なけれど、人傳に聞き及びしには、相承の沙汰に就きて、邪の計らひをする者ありしとやらん、是れ最も愚老が歎きなり。道西、こゝにて會ひしは幸ひなり、仔細に顚末を語らせ候らへ』

僧都の語氣は漸く急になりぬ。道西は駕籠近く進み寄りて、はやはら〳〵と熱き涙を瀝ぎたり。

『遺國なれば、御中陰の御上洛は慨はすとも、百ヶ日の御法養には、必らず御上り在すべしと存じて、疾くより街道に人を出し、今日や御怨籠を打たせ給ふ、明日や尊容を拜すべきと、御待ち受け申し上げつる程に、今朝初めて驛にて怨籠の者を纏せられしと承はり、夫より御後を慕ひ參りて、漸々見參に入りつる事、道西が身の幸ひのみには候はず、誠に本願寺本末門徒の幸ひにて候ふ』

『さては愚老が僻耳にてはあらざりしな。人の讒言にてはあらざりしな』

『なか〳〵の御事。此度御上洛の上は、本願寺第八世の御相續相違なく整ふやう、御馳走の程、願はしう存じ候ふ』

大地にはたと額づきて、道西は身を顫はしてぞ嗚咽び入りぬ。僧都は腕を拱ぬきて、深く思案に沈みぬ。昇夫は草鞋を新たにして、其處に蹲踞みて相待つなり。

『道西、足下が忠實なる志は、宣祐等く謝し申すぞ』

『こはまた過分の御賞詞、却つて痛み入つて候ふ』

恐る〳〵面を擡れば、地の土は心字に濡れて、涙は深く浸み徹みたり。

『大谷殿に參りては、緩々足下とも會ひ難からん。兎も角も一應の成行きを、我等の爲めに語り得させられよ』

僧都は怨籠の戸を開きて、半身を乘り出したり。道西は法衣の袖に涙を拭ひて、是れも怨籠に身を近け、前後に眼を配りたり。

『御往生の事は、申上ぐるまでも候はず。御葬儀の式に臨んでは、中納言樣(兼實)こそ御喪主に在せば、萬事御計らひ在すべしと存じ候ひしに、左はなくて、阿闍梨樣(應玄)を御導師に立てさせられ、中納言樣は萬事阿闍梨樣の御計らひに從ひ給ふ。心ある者は、皆な眉を顰めて候ひしに、三河より上り參りたる佐々木上宮寺の如光と申す坊主、曾て承知仕つらず、如圓尼公(海老名氏)に對して、前上人御遷化の上は、中納言法印樣御相續は當然なるべきに、何とて阿闍梨樣の御計らひに從ひ給ふやらん、田舍坊主の心得の爲め、直々仔細仰せ聞させられよと、申し爭ひて候ひしに、尼公の

仰せとして、妾は何事も計らふ者にあらず、先上人常々の御遺言ありし上は、如何とも詮すべなし。汝等も先上人の御爲めに、能く年若の圓光院を輔佐して、御中陰までの大役を、滯りなく勤仕さするやう、改めて頼み入るとの事にて候ひき。かゝる上は申し爭はんよしもなく、勿論御法發は大切なれば、阿闍梨様御相續の證にて、孰れも御計ひに任せ、御中陰も無事に勤仕申し上げて候ふ。御百ヶ日相濟む上は、第八世御相承も定り申すべければ、中納言様御相續相違なく相濟むやう、偏へに御骨折願ひ申し上ぐる』

道西は、息も繼ぎあへず、一應の事情を述べ訖つて、またもや大地に頭をうちつくるなりき。

『足下に端なく面會を遂げて、巨細の様子を聽くことを得たるは、本願寺の法統を正しうせんため、開山聖人の御紹合ところ覺え候へ。愚老上洛致す上は、應玄家督の事果して遺書に上せられしや否や、夫等の實否も聞糺して、飽まで正統相續を爭はん覺期なり。兼詩も定めて不快に存ずるならんも、義理ある母の計ひなれば、彼には爭

ふ氣力もあるまじ。迚も角ても愚老にうち委せて、心安く思ふやう、足下等より慰め置かれたし。委曲の事は大谷に於て、篤と申し談じなん』

宣祐僧都は懇ろに道西を慰諭て、更に再會を約しながら、手づから駕籠の戸を閉むれば、待ち倦みたる昇夫は心得て、前後齊しく肩を入るゝや、輕々と昇き上げて、二里には近き華洛の方へ、急ぎて歩みを運べるなり。道西は靜かに膝の塵をうち掃ひ、笠杖を取上げしが、頼もしげなる僧都の語に胸を擦りて、同じ道をば急ぎ去りけり。

『瑞泉寺様御上洛』の聲は、大谷本願寺に於て、一種鋭き響きとなりて響きたるなり。内亭に在りて此の聲を耳にせる人々の、心に與へられたる感動と、兼壽が方の人人の、耳に響ける感覺とは、自から憂驚の境を殊にしたるなり。

寳德元年の秋、卅五歳にして北陸遊化の程に上りし兼壽法印は、行く〳〵祖師の御足跡を尋ね奉つり、今津の浦に宿りては、輿を辭して草鞋を召されたる、往來の有緣をさへ棄て給はざる深心を懷び、有知の山を越えては、行き勞れて御爪頭を破り給ひ、『足も血しほに染めしばかりぞ』の即興に慰められし苦を畏み、越前の國に入りては、

所縁の寺院を歴訪して、祖師宣傳の餘光を仰ぎ、加賀の國に越えんとして、坂北郡細呂木の郷、鋸坂の嶮を踏みつゝ、『身のゆくさきは心ほそろぎ』の祖歌を思ひなどして、白山の雪に冬の心をしめ、越中井波の里なる、叔父君如乗僧都を音はゝやとて、河北の郡二俣の山越して、そこの本泉寺に宿を定めぬ。こゝは叔父公の開基ながら、今は専ら瑞泉寺に在して、此の山院は坊守の御弟子に託され、此の間無住の狀態なりしかば、雪深き冬の果るまで、こゝに住して年を迎ふる事としたりき。

明る二年には、雪を踏んで越中に越え、井波の瑞泉寺に伺候し、叔姪の親みを温めて、肉身の飾りなき教訓を被り、夫より越中を巡錫して、周く先蹤の地を拜し、轉じて加賀に復り、能美郡大杉川の東の岸なる波佐谷といふ處に、一宇の精舍を建立して、松岡寺と號けつゝ、是れを北陸巡拜の記念として、尚ほ祖師聖人の過たまひし道を歩し、越後の國に辿り着きては、急ぎ聖人配所の跡を尋ねて、悲慕涕泣にうち伏しながら、輙く頭をも得擡げざりけり。

軟やありて僅に面を起しつゝ、つく〴〵と此地の樣を相るに、聞きつる鐵林は今も

高く後に聳え、漫々たる深淵は底知らぬ水を湛えて、若玄く澄みわたれり。こゝに黒木の卿庵を結びて、金を鑠かす炎熱の夏の日も、指も摧くる亙塞の冬の夜も、肩に垂るゝ禿髪を拂ひては、目を聖教の卷に曝らして、五年の居諸を送り給ひしかと思へば、一日一椀の糧に饑を凌ぎ、紙衣を重ねて寒を堪ゆるは、分に過ぎたる果報なり。あら勿體なや、冥加なやと、感歎を禁じ得ざりき。

去つて鳥屋野の淨光寺を訪へり。聖の蹟を絶たじとて、篤志の人の營みけん、小柴垣結ひ繞らして、丸木の門を閉ざしたり。排きて内を伺ふに、狹少ながら法の如き庵室ありて、荒れたれども名號の一軸はかゝりたり。承久の昔、順德院天皇佐渡遷幸の砌、この道場の跡叡覽在らせられんとて、玉冠を廢院に回らさせ給ひし時も、露のあはれはかくこそありけめ。かゝる田舍の草庵に御幸なりて、鳥屋野淨光寺の號を勅賜在らせられしは、千里の波濤を渉りて、絶海の孤島に幸きせさせ給ふ叡慮に、現當二世の安穩を願はせ給ふ故にこそ在すめれど、愚禿親鸞の教法の、遙かに天聽に達して、御歸依在らせられずんば、いかでか邊路の御幸あらんやと、坐に往事を追懐して、低

徊久しく去る能はざりき。

是れを北越の名殘として、道を轉じて信濃に入り、暫時長沼に錫を留めて、夫より再び關東を巡歷したるが、越前に於る三門徒の狀況を視るにつけても、善懲大德の眞宗を捨て祝巫に墮したる不孝の行ひ、しみ〴〵と心惡く思はれければ、國府津の遺蹟の柳をも見まじとて、笠を傾けて駈け過きなどし、三河に入りて上宮寺を訪ひ、如光の上洛と打伴れて、大谷殿に歸着したりしは、寶德四年(七月享德と改元す)の孟夏、東山は若葉青葉に、杜鵑をきく頃なりけり。

此間に、久しく缺けたりし室町御所は、義政公將軍職に据らせられ、管領には、龍安寺殿細川勝元、再び其の職に就きたり。兼壽が方には、第三男兼祐蓮秀出生して、華開院に遣はされ、昔しに變らぬ赤貧洗ふが如き生活を續けたり。然るに裏方伊勢殿は、享德三年に第三女壽尊尼を生み、翌康正元年に續けて第四男康兼蓮誓を擧げたりしが、是より太く身體を害ねて、終に往生の素懷を遂げ、了如尼と法號せられぬ。兼壽の悲歎は言ふも更なり、光高丸もはや十四歲になりて、母を慕ふこといと深く、

哀愁の狀見るに忍びざるより、存如上人の肝煎によりて、同じ伊勢下總守の次女、即ち了如尼の妹を納れ、繼室とぞしたりける。

悲喜交々來りて、何とやらん心落着かざる折しも、長祿元年六月十八日といふに、存如上人圓兼法印は、世壽六十二歲にして獲麟に及ばれたり。兼壽は只だ一柱の親なれば、哀慕の涙晴るゝ時なく、今姑らく御存世ならましかば、不肖ながらも御法務を補け奉つりて、聊か興法の志を著はし、利生の實を擧げて、御勸化の庭を賑はしたらんものを、中道にして終に歸寂し給ひしこと、何の遺憾か之れに及くべきと、只だ此事をのみ歎き悲しみたり。

如圓尼公は、追慕にくるゝ兼壽法印を、言ひ甲斐なしとや思ひけん、何事をも語らふことをせず、青蓮院准后尊應僧正に入室して、今は出家得度を遂げたる舍弟、圓光院中納言阿闍梨權大僧都法印應玄蓮照を招き迎へて、總てを彼に計らはさせ、兼壽はあれども無きが如き姿となりしかば、眞實眼近なる道西等の、何として默止すべきぞ、百ケ日の法要に參會せんため、越中瑞泉寺より出來たりし青光院僧都如乘上人宜祐

を途に要じて、斯くは有りし次第を訴へたりしなり。

宣祐僧都の内亭に伺候したりし時には、如聞尼も心の決したる所ありけん、儼然として應對なしつゝ、我が爲す事に非分を申し募られんには、御連枝とて容謝はならじと言はぬばかりに、連りに威儀を繕ひて應對せらる。宣祐僧都は苦々しくは思ひながらも、百ケ日の逮夜を迎ふるまでは、唯だ何事も知らず貌に持て爲せば、如聞尼が張りたる肱の方、いつしか力の衰へて、心に緩みを生ずるに至れり。

今夕の御逮夜に就きて、一山の執務を定るに及びて、僧都の沈默は初めて破れたり。

『論議式の證誠ならば、二男たる應玄阿闍梨の勤むる法もあるかは知らねど、逮夜の法事に法嗣の者をさし措て、大導師を勤むること、言語道斷なり。如何なる先例に遵ひ、何人の詮議にて、箇やうには取り定めしぞ』

會行事を喚び付けて、僧都は鋭く詰問に及べり。會行事とても非理なることを知らぬにはあらねども、尼公よりの内意にて、中陰までは斯く仕來りたる次第なれば、非波殿の不審といふとも、私に變更すべきにあらず、

『御中陰まで御上洛在さゞりしかば、御承知在らせられぬは御道理にて候ふ、此儀は阿闍梨樣御家督の御事とて、前々より箇やうに仕つりて候ふ』と、辯明の已むなきに至れり。

『應玄が家督とな。汝は誰より左やうなる不義の沙汰を承はりしぞ』

『御遺言の趣きにて、尼公より慥かに仰せ聞かされて候ふ』

『御遺言とな。御遺言とな。汝は承はり差へづらん』

『否、否、正しく左やう承はりて、現に御中陰までも、阿闍梨樣の御計ひにて、滯りなく勤め果て候ふ』

『左ありては、卑耳とも思はれず、汝は其の御遺言狀を拜見したるや』

『さ、其義は一向に存じ申さず。尼公樣仰せなれば、よも僞りとも——』

『申すな。言語を愼まぬか！』

僧都は一聲鋭く叱り付けたり。會行事の慴れをなして俛首るゝ時、僧都は更に聲と色とを厲しうして、

『大本山の一萠ども在るべき汝、何とて左やうなる輕卒を働らきしぞ。上人の御心にて、御家督は兼帶法印と定め在しつればこそ、新門主として其の位に居らせ置かれしなれ。法印に相續の伎倆なきならば格別、左もなきに長幼の序を顚倒して、應玄に御家督を讓らせらるゝこと、萬に一つも有るまじき御沙汰なり。さる御思召在すとも、非義非道の理を申し述べ、飽くまで御諫言申し上げて、順逆を正しうするが、汝の職分にてはなきか。殊に新に良人に別れ給ひ、悲哀に御心の紊れたる女性の仰せを、一言の不審も申立てず、委細畏づて執行に及ぶ條、甚だ以て奇怪至極なり。御遺言が僞りならずば、唯今これにて拜見致さん。御遺言狀これ無きに於ては、今夕の行事は先規に任せ、兼帶法印大導師たるべし。疾くせよ、疾く疾く』と、高聲に論じ詰めたり。

會行事も今は返す語もなく、奥に參りて尼公に由を告げぬ。言はるゝまでもなく、如圓尼は手に取る如き靑光院の怒聲を聞き、その返答を思案する折なりしかば、御遺言狀の事は、直々御返答申すべければ、奥へ御入り在らせらるゝやうとて、會行事

を此の交渉より斥けたるなり。

僧都は如圓尼に對面するや、遺言狀拜見の事を迫りしに、如圓尼は白無垢の袖に涙を包みて、愬ふるが如く陳ずるなりき。

『御遺言狀は、妾とても未だ拜見候はねども、御生前に遊されし事は、慥に御物語にて承はりて候ふ。そは、中納言殿御聰明に在しまして、別に一流開立の御志あり、御開山樣御遺蹟巡拜の名の下に、前後五ヶ年餘りも、東國北國に行化せられ、其間には、年の內に四度五度、近江あたりに勸化せらるれば、在來の御門徒も、自から上人を蔑ろにして、偶〻上洛の僧侶達も、此方へは只だ通例の御伺ひとして參るに過ぎねど、中納言殿の方に參りては、綾々御法義を聽聞して、尙ほ後々の御沙汰までも申し請ひ、懇念を運ぶの輩、日に月に多くなり侍る。かゝる上は、中納言殿に當山の寺務を繼ぐ志在さぬこと明らかなり。家督は應玄相續勿論なるべし。此事今披露せるに於ては、繼母の讒言などいふものありて、如圓も心苦しかるべし。されば、仔細を一紙に認めて、後の明證とすべければ、命終の後は、應玄の回向こそ受けたけれ

と、妾確と承まはる。此上は御不審を散じて、今宵の御逮夜滞りなく勤めらるべし』

情深き婦人の、泣きつ、怒りつ、智辯を揮つて口說き立つれども、硬直なる僧都は、齒に衣被せず一々所由なき旨を、反駁せり。それにも屈せず尼公は、尙ほ進んで詳細に辯じ立て、互ひに一歩も讓らじと爭ひたるが、僧都は遂に得堪へず、

『互ひの口論に時を移すとも、明證なければ善惡邪正は判ち難し。此上は御遺言狀を拜見して、我執を斥くるより外は候はず』

『さ申さるゝは、妾の言を僞りと疑はるゝならん。僞り者と言はれては、妾のみかは、御入寂ありし上人までも御名折なり。さあらば御親書御目にかくべし』

『いざ拜見仕つらん』

『見せいでやは』

尼公はつと座を起ちぬ。今は前後の思慮も紊れて、料紙文匣、手筥、書箱の類まで、宣祐が前に持ち來り、底を覆へして檢ぶるに、涙を誘ふ水莖の迹は、幾百枚と限りなけれど、遺言狀と思しきは、その草案をさへ見出し得ざりき。

『尼公、此の内には在さぬぞよ』

僧都の眼は閃々と光りぬ。如聞尼はさつと色を變じながらも、尙ほ屈せんとはせで、

『有るべき物の無き筈はなし』と、再び故上人の常住の室に入りぬ。

僧都も續いて其處に致りぬ。手澤香しき經卷より、歌物語の類まで、一卷毎に打披きて檢べたれども、更に得る所あらざりしが、最後に繙きたる聖敎の中より、不思議にも遺言狀は發見されたり。

斯くと見たる僧都は、面色忽ち蒼くなりて、胸には不穩の波立ち騷げり。尼公も亦、捧し手のわな〳〵とうち振ふほど、心に大なる畏怖を生じたり。既に遺書狀を探り得ながら、互ひに披くことを憚る所へ、折よくも應玄は入り來たれり。尼公は遂に心を勵して、應玄をして朗讀せしめたり。

應玄は之れなき爲に、叔父僧都の異議を挾さまれしを、口惜しと思へりしかば、僧都の悄然たる姿を見下しつゝ、颯と開いて高らかに讀みかけつゝ、呀と駭いて御親書を取り落せり。三人の眼前に飜へりたる遺言狀には、兼論の家督を指定するのみなら

ず、其の法嗣として、光高丸をさへ指定しありたり。

青光院の忽ち息を吹き更したらんばかり、意氣軒昂たるに反して、如聞尼は見ゆる限り血の氣の失するまで、恐怖と慙愧とに閉ぢられて、其處に身をうち臥したるまま、悔恨の涙に袂の朽つるを念はざりけり。驚き惑ひたるは應玄なり。彼は唯だ敬愛する生母の一語を信じて、自身は正しく故上人の家督なり、本願寺第八世の上人なりと信じて、今日までは假に法務を執り、忌辰の導師をも勤め來しものを、一朝遺書の披かるゝや、生母が自身を偏愛せるため、淺ましくも父の意を矯めて、强て己を寺務職たらしめんと企畫たりしならんとは、彼には實に悲むべき意外なりき。

應玄は裝ふたる導師の法衣を脱して、僧都に捧げつゝ、今日を限り世を遁れて、叔父公に隨ひ、加賀越中の山林に跡を晦し、心靜かに後世の營みをしたしと乞ひ、如聞尼は空恐ろしき邪惡の念を懺悔して、願はくは、第三の女の長ずるを待ちて、二歳まさりの姉ながら、光高丸に婚せて賜はれと歎きぬ。僧都は二つながら諾ひて、母子の心を安んじさせ、兼法印の手を把りて、今宵の逮夜の大導師に薦めたるなり。

是に於て兼譽は本願寺の法統を繼ぎ、第八代の宗主蓮如上人と仰かるゝ事となれり。時に歳四十三とぞ聞えし。

一、蓮如上人の仰に、行くさき向ひばかりを見て、足元を見れば、踏みかぶるものなり。人のみばかり見て、我身の上を嗜まずば、大事たるべきそと仰られけり。

（蓮如上人御物語）

第七　遠忌の涕

當流上人の御勸化の信心の一途は、罪の輕重をいはず、また忘念忘執の心のやまぬなんどいふ、機の扱ひをさしおき、只だ在家止住のやからは、一向に、諸の雜行雜修の惡き執心をすてゝ、彌陀如來の悲願に歸し、一心に疑ひなく賴むこゝろの一念發るとき、速かに彌陀如來光明を放ち、其の人を攝取したまふなり。是れ即ち佛の方より助けましますこゝろなり。またこれ信心を如來より與へたまふといふも此の意なり。されば此上は、假令名號を稱ふるとも、佛助けたまへとは思ふべからず。只だ彌陀を賴むこゝろの一念の信心によりて、易く御助けあることの忝けなさのあまり、彌陀如來の御たすけありたる御恩を、報じ奉つる念佛なり、と心得べきなり。是れ眞の專修專念の行者なり。これまた當流に立つる所の一念發起、平生業成と申すも、このこゝろなり。あな畏、あなかしこ。

寛正二年

蓮如寺務を執りてのちは、教義の混濁を清め、祖師立教の正意を明かにして、一たび宗風を弘長の昔しに吹き復さんと志し、只管化導に勉めたりしが、親鸞聖人開宗弘通の地たる關東にては、管領足利成氏、執權上杉憲實を殺して、下總古河の城に據り、古河公方と稱して、兩上杉と戰ひを續け、兩上杉よりは新に管領を申し請ひて、室町殿の御弟和政公をさし下され、堀越御所と號して、古河御所に對抗し、合戰熄む時なかりければ、路次梗塞りて、上洛の道俗の跡を斷つこと五六年。世の亂れは關東のみにあらずして、京都にても過る年より、畠山兩家、即ち右衞門佐義就と、右衞門督政長と家督を爭ふて確執を生じ、細川山名力を戮せて政長を援け、火を放ちて義就を攻めしかば、義就遂に御勘當を被りて大和に奔り、河内に根城を搆へて、南都の大衆と、政長の大軍とを引受け、勇猛に戰ふによつて、人々更に安き心もなく、朝夕の參詣さへ寥々として、僅かに指を屈するばかりとなりぬ。

されども、蓮如の上人となりてよりは、何事を措きても參詣の老若を優遇して、勉めて信心の肝文を說き聞かせ、兩堂を開放して、自由に出入せしめたれば、之れを先

代の時に比するに、篤信の者漸く其の數を増し、教俊、良珍等の常侍衆はいふも更なり、金蛇寺明照、金ケ森道西、上宮寺如光等の坊主分まで、足繁く伺候すれば、御堂には枯れたるまゝの花を獻つることなく、境内には落葉の塵塚を築くこともなく、門前を過ぐる市人等さへ、見かへりがちに過ぐるやうになれり。

殊に道西が執心によつて、東近江に信順の門徒殖えしかば、正義を取外さぬやうにと、長祿四年（十二月寛正と改元す）六月、道西の望みに任せて、正信偈大意を製作し、左の奥書を加へて之れを與へたり。

右この正信偈大意は、金ケ森の道西、自身才學にそなへんが爲めに、連々その望みこれありと雖も、予いさゝか其の料簡なき間、かたく斟酌を加ふるところに、切りに所望の旨去り難きによりて、文言の卑しきを顧みず、また義理の次第をもいはず、唯だ願主の命にまかせて、辭を和らげ之れを記し與ふ。其の所望ある間、かくの如くこれを記す所なり。敢て外見あるべからざるものなり。あなかしこ〳〵。

于時長祿第四之天林鐘之比染筆訖。

遂如は初めて放釋の筆を執り試みしが、豁然として聖人の文書を重んじ、安心の要訣を多く御消息にて決させ給ひにし深意を、解することを得たりしなり。口より耳に授くるものは、我が詞はそのまゝに通ずることを得れども、其人の之れを複演せんとする時には、語にも長短あり、意にも過不足ありて、我が說しまゝの姿にて、第三の人に移すことは、至つて難かしき事なるべし。說く人の辯不辯によりて、聖教の意に伸縮を生ずるとすれば、說く人を交ふる毎に、教義の肝文に多少の相違を生じ、寸は尺となり、尺また變じて丈となりなんとも斷じ難く、遂には當流の安心を誤るの科を招くことはなきや。恐れても恐るべし。

之れに反して、文書を以てする時は、幾百たび見る人を交ふるとても、記し留めし筆の跡に、些の相違を生ずべきよしもなければ、百年、千年にわたりても、人を誤ち法を害ふことあるべからず。熟々先聖の深意を推量し奉つるに、末代の龜鑑たらしめんとて、專ら文書に御力を注ぎ給ひしなるべく、教行信證文類の事は申すも畏し、御

和讃の御製作、一念多證文の御釋述、孰れも萬代不易の所依なるに、御門弟に與へ給ひし御消息の如きは、末弟の迷ひを照らす燈明にして、當流奥旨の寶典なり。また、かゝる末世劣機の有情を救濟すべき、易行の妙法を弘通し給ひたる、祖師九十年の芳跡も、覺如上人之れを筆に上せて、給詞傳に遺し給はずんば、後昆誰か之れを審らかにすることを得べき。今我等の祖師の高德を景仰し、報恩の冥加を讃歎することを得るものは、即ち是れ覺如尊師の遺し給へる華文の賜なり。世を去り時を距つる程、玄旨要訣の正しき釋に遠かりて、自家憶斷の流弊を免れざるものなるに、存覺上人の博學廣才なる、教理の正宗を鈔釋し、式典作法を正して、幾多の述作を遺されしかば、永く法海の羅針盤として、方角を誤ることなく、事毎に之れを繙けば、即ち身親しく講座に侍りて、口訣を聽聞するの想ひあらしむ。是れ皆な文書の餘光にして、筆紙の功德ならずや。仰ぎても仰ぐべし。

所詮口と舌とは、時を限り人を量りての用たるに過ぎず、筆と紙とは、無根の時に渉り無量の人に對する、不朽不滅の金剛說法なり。開山聖人既に筆を以て舌に代へ、

紙を以て聲に交へ、歷代上人も亦口授の要義を約して、文章を以て妙理を明らかにし給へり。舌と筆と交呼應して、現未來に教旨を傳ふるは、正しく當流上人の、當に勤むべき務めなり。嗚呼文書なる哉、文書なる哉。！

蓮如は深く文書化導の利を感受して、固く心に期する所ありしかば、寛正二年の夏、金ケ森の道西が、頽齡正に六十三歲となりて、いつ死門に向はんとも計られねば、何卒信心の要文を戴きて、身後までの信條と仕つりたしとの所望に對し、龍管を握つて、一通の消息を草し、親しく道西に讀み聽かせたるものこそ、即ち此の『當流聖人』の一章なりしなれ。

『愚痴鈍根の我等が耳にも、障りなく能く入り候ふて、而も心腑に感ずる所深く、信心要義、初て領解したる思ひにて候ふ。此の難有き聖教を、何と稱へ申すべき』

道西は隨喜の涙に咽びながら、恭しく尋ね奉つるなり。蓮如は深く考ふる暇なく、

『聖教といへば恐れあり。又別に法門ありげなり。只だ文どこそいふべけれ』とて、之れを道西に授けたりき。

今歳は、開山聖人入寂の弘長二年より、正に二百年目に相當せり。蓮如は夙く今年の大遠忌法會に心を注ぎ、之れが先例を案するに、應長元年の五十年大遠忌は、覺如上人勤修ありき。當時大谷の本廟は、唯善坊の異方便を廻らして、上人との對論に破れたるより、御影像と御骨とを奪ひて、鎌倉に奔りし後にて、荒廢の狀見るも涙の科なりしが、上人は熱誠に再興を全ふし、夏は越前に、秋は伊勢に巡錫行化して、霜月廿八日嚴かに聖忌の御供養ありぬ。一百年大遠忌は、南朝の正平十六年、北朝の康安元年にして、南軍の京都を襲へるなど、天に二つの日月ある折なりしが、善如上人懇に修し奉つり、存覺上人之を補佐して、其の歎德文、六要鈔等に傳はりぬ。應永十八年の一百五十年大遠忌は、蓮如の生前五年にして、巧如上人法務に備はると雖も、本願寺衰微して、二十四輩六老僧の上落も絶え、僅に一山の門侶を集へて、報恩講を修したるに過ぎざりき。此の歎くべき悲しむべき頹勢を受けて、こゝに偶回り來れる大遠忌なり。蓮如は太く心を碎きて、いかに我が大願を成し遂げんかを苦慮するにぞある。

蓮如は旨を敎俊に傳へて、四月四日を以て關東に進はし、巡國勸化せしめたるが、關東の道場といへども、亂世のために多く退轉して、今存するもの大小草庵三十六箇寺に過ぎず、夫すら半は廢となりて、耒耜を把つて田畑に耕作しつゝ、漸く御堂を守る狀態なれば、所詮十分の喜捨を得ること能はず、兎にも角にも、使命だけを果して、八月二十三日といふに、敎俊は歸山したりき。

此際此時、蓮如は心に無形の重傷を負はされたり。そは大遠忌に先つこと一箇月、十月四日を以て、繼母如圓尼の往生を遂げられたる一事なりき。應玄蓮照は、瑞泉寺宣祐僧都の歸國に隨ひて、加賀の國に隱遁し、學本房と號して、忍びて江沼郡粟津の溫泉に浴みして在りしに、偶然能美郡津波倉なる本蓮寺(皿願僧都の嗣)に對面ありしかば、已むなく彼の寺に移りて逗留せらるゝよし、蓮如の方に聞えたるにぞ、固より捨て置くべき間柄ならず、且は殊勝なる心柴も、いとゞ憐れに思ひたれば、近頃左やうにて在さんには、加州の內所れへなりとも、居住し候へかしと、申し送りたるが、學本房も强ち之れに抗らはず、遁世の身に罷り成り候ふ上は、山居こそ望ましけれと

應へらる、さればとて本願寺に託して地を相せしめしに、同郡大杉谷といふ處に入りて、こは面白き處なるよと、國中の人足を集め、大山をひき平らげさせて、こゝに御堂臺所など式ばかりに營み、今は心靜かに閑寂を樂しむ身となりたれば、此度の上洛は所詮思ひも寄らざるべし。乃ち季の弟蓮康大貳に後見して、葬儀菩提を取り行ひ、中陰の法會をも繰越しつゝ、二百年回忌の法務に齷齪たりき。

金寶寺にても、二百年遠忌報恩講を修したしとの懇望ありしかば、快く之れを諾して、親しく法要を勤修し、さて愈十一月廿一日より七晝夜の大法會を修し初めたり。固より穩かならぬ時勢にして、路次の通行も如意ならねば、參拜の群衆堂上堂下に充塞せんとは思はねども、關東筋の道俗は、多少參詣あるべしと期待したるに、生憎なるかな、東國にては近年稀なる大雪降りて、人馬の通路も塞がりぬとて、僅に僧侶七人のみ上洛し來たれり。蓮如は意外の天災にて、法筵のやつ〳〵しくなれる事、歎きても尚ほ餘りある恨事ながら、さる中をも厭ふことなく、難を排け嶮を凌ぎて、遙々上洛の懇志を達びし、この七人の僧達は、三十六人悉く上洛したるにも勝りて、この

たびの法會の花なりと稱へたり。

斯くて集會し來たりし十九人の僧侶を加へ、法會を勤仕する者合せて二十六名を得たれば、即ち金寶寺明照を導師として、廿一日の逮夜より梵鐘法鼓を東山の寒風に響かせつゝ、眞信を抽で丹精を勵し、最も嚴肅に、最も懇篤に三座の法事を怠りなく修したりしなり。初めは庭上に二三の人影を認めしに過ざりしも、廿八日の滿座なる報恩講式に至りては、參詣の群衆漸く數を增して、こゝに六十人の篤信なる老若を得たり。この人々の口より出る報恩の念佛の何妨ぐるものなく境内に反響して、肅然たる法會の場を賑はしたるには、蓮如も衷心驩喜の情を抑へ難く、法嗣たる光助法印順如を顧みて、

『彼こそ一定極樂往生の人々よ』と、坐に感涙を浮べたりけり。

餘りに靜肅に、餘りに謹嚴なりしこの大法會は、蓮如の心を鞭撻する警策となりて、奮然として一大崛起の勇猛心を興さしむるに至りぬ。蓮如は己たま〳〵祖師の勝緣に値遇し奉つりながら、祖教の妙旨を廣宣し、易行の明文を流通すること能はざりしを、

一身の不德の罪に歸して、不孝の科を深く懼れ、厚く愧ぢぬ。夜更け人定りてのちは、一念の慙悔太く心を攻めて、安らかに枕を傾くること能はず、端坐して沈思默考に入らしむるなり。斯く思ひ斯く考ふる時にあたりて、ゆくりなくも心の奥より奇しき密語を聞けり。

『和兒の御一代には、御開山聖人の御一流を弘通して、祖師の恩德に酬ひ奉つらんと、御志を立て給ふべし』

蓮如はこの密語を聞くと同時に、驟然として身を起せり。同時にまた確然として意を決せり。

『捨身ー』

吾が聲に自ら愕かされ、四邊を一順見回しながら、徐かに坐して微笑を含みぬ。

『我は正しく身を捨ることを忘れたるぞ。開山聖人は遁世の志に誘かされて、寰嶰院を謙下したまひてよりは、形儀に拘はらず、聲名を修めず、三界光住の雲水に托して、唯だ我も信じ、他にも信じさせんとこそしたまひつれ。歴世の清規に拘み、他

宗の見聞を憚り、徒らに信者門徒と隔壁を設くること、誠に所由なき沙汰なりしよ。吁ー　吁!!　吁!!!　今は全く身を捨てたるぞ』

蓮如は十五歳にして始めて立たる、眞宗再興の志を明らかにせんがため、其の夜の明るを待つて、佛前の莊嚴を徹撤し、須彌壇上を清掃したり。尋で天台密の儀軌によりて、嚴かに繕へたる護摩の壇をも卻けたり。疾より意に滿たざりし他門他宗の經文も、一束にして棄て了んぬ。此の莊嚴と、此の密壇と、此の經偈とは、塵の世の穢れに朽ちさするを憚りて、清淨なる火に委ねたれば、看る〳〵一道の烟りと化して、再び跡を龍谷に留めざる事となれりき。

是れすら人々の駭きを買ひたるに、蓮如は尙ほ足れりとせず。急ぎ番匠を呼び寄せて、對面所の床を張り替へよと命ずるなりき。番匠は別に何と申す語ごてもなく、唯だ命ぜらるゝまに〳〵、正面に設けたる上段の間の框を除き、其の床をも切り下げて、二の間も三間も唯だ一樣の平座には均らしたるなり。

蓮如は廣々としたる座敷の狀を見て、

『是れでこそ』と默頭けり。

慶聞坊龍玄は、此の體を見て訝かしく心得たれば、恐る〳〵問ひ申すやう、

『孰れの御亭にても、必ず上段御入り候ふに、何とて下段と同物の平座には遊しつるやらん。田舍の人々、常住出入の衆に御對面の時、是れにては御形儀いかゞ候はん』

蓮如は莞爾とうち笑みて、

『佛法を弘め、宗義を勸化せんに、上蔟のふるまひにては成るまじきぞ。下主近く萬民を誘引せんには、いかにも〳〵下主近く諸人を招き寄せて、勸めんとこそ思へ』

と、說き諭しぬ。

龍玄の尙ほも會得し難る面色なるに、重ねて聲を和らげて說き聽かせぬ。

『龍玄よ、佛法は捨身の行なれば、我も身を捨て聖人の御一流を弘めんとは思ふなり。斯やうに身を捨て平座にて皆と同席するは、聖人の仰せに、四海の信心の人は、皆兄弟と仰せられたれば、我もその御詞の如くなり。又同座をもして在らば、不審なる事をも問へかし、信をも能く說かんとの願ひなり』

仔細に承さはるに及んで、龍玄は凡慮の不審を愧ぢ、難有き上人の思召しに感動して、何とも申し述べん詞を知らず、廣縁に飛び退りて、はたと兩手を突きたるまゝ、頭を床にうちつけて、一向感涙に咽びたりけり。

一、蓮如上人仰せられ候、物を言へ〳〵と仰せられ候、物を言はぬ者は恐ろしきと仰せられ候、信不信ともに、たゞ物を言へと仰せられ候、物を申せば、心底もよく聞え、又人にもなほさるゝなり、たゞ物を申せと仰せられ候。

（御一代聞書）

第八　刼火の炎

開歳の陽の光りは、己に四明の嶺を照らせども、上寒の温かき風は、未だ三塔の谿に迺はず、寂寞たる老杉の陰、寒光素花を凝らして、筧の水縷よりも細く、磊磈たる古道の角、氷及苔衣を割いて、嵒の機鋭よりも滑かなり。午尅ほ溶けざる水晶龍を、簷深く垂れながら、老僧は爐を擁して顯密の秘を語り、若僧は力を角して閑諍の術を鍊る寂岳の午下、忽ち殷々として一山に響破する洪鐘の鯨音を耳にしたり。

一聲、一聲、又一聲、撞き鳴らす洪鐘の響きは、大比叡おろしの風に送られ、谷を閉す氷に反響して、聲の至らぬ隈もなく、俄かに遠雷の如き聲、谷々より起り來りて、板金剛を引ずりたる荒大衆等、五條袈裟に面を裹み、黒衣に大刀を横たへて、楞嚴横川を空しうし、急ぎ大講堂の廣庭に參集するなりき。

春とはいへど正月は八日なり、嶺々より吹き下し、谷々より吹き上げる寒風は、この大庭を施つて圓圈を畫けり。集り會ひし三塔の荒大衆も、風の畫ける圓圈を圍みて、

十重二十重に圓を畫けり。

時に中啓の扇を面に翳したる一人の法師、つか〳〵と進み出て、高聲をふり立て、語氣鋭く詮議の口を發きぬ。

『世は末世に及ぶといへども、日月未だ地に落ちたまはず。夫、我が山は王城の鬼門を守護し、鎮護國家の道場として、往昔延暦年中、宗祖傳敎大師、桓武帝の叡旨を奉戴し、大師自ら杣をとりて開闢し給ふ。故に日本六十餘州の内、未だ曾て我が天台山に障得をなす者あるべからず。是に依つて王法永く衰へず、佛法年と興に盛なり。されば、一朝佛法王法に障礙をなす者あらば、我が山より訴へて聽かれざることなく、忽ちにして其人を遠流に處し、或はまた其寺を破壞して、破邪顯正を明らかにし給ふ。看よ、看よ、往年黒谷の源空、專修念佛を弘興の時、土御門院に訴へ奉つりて、遂に源空を遠流に謫せしめつるは！』

一喝して大衆の方をきつと看渡せり。憤慨したる語勢に煽られて、激昂したる荒大衆は、動搖みをうつて呼吟き立てたり。